滲んだ世界で、見えない言葉を。

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
滲んだ世界で、見えない言葉を。

【Ｎコード】
Ｎ４１６１Ｚ

【作者名】
うわの空

【あらすじ】
休職し、精神科に通う俺と、不登校気味の彼女の物語。
細かい説明を省いている部分もありますので、各々の解釈で楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

俺はあの時、どんな顔をしていただろう。もしかしたら、笑っていたかもしれない。

高校二年の冬、両親が死んだ。殺人事件だった。

見ず知らずの人間に襲われた母、それをかばった父。――二人とも、ナイフで刺されて死んだ。犯人の動機はいたって簡単。『誰かを殺したかったから』だ。それ以上でも以下でもなかった。

通り魔による殺人事件として、しばらくの間テレビで報道された。

路頭に迷う、という表現は間違えているかもしれない。頼れる親戚なんていなかったけれど、頼れる大人が周りにいたことは確かだ。大人（かれら）は、独りになった俺を支えてくれた。けれど、両親を失ったショックは大きかった。どうして俺の親が死んだんだろうと、いつも考えていた。

俺の前を歩いている女性の後ろ姿を、ぼんやりと眺める。歩きにくそうなヒールを履き、のんびりと歩くその姿を。……どうしてそんなに、無防備に歩けるんだろう。この前、通り魔のことが報道されていたはずなのに。

俺は猫背で歩き、常に後ろに怯（おび）えながら過ごすようになった。

あれはいつだったろう。今思えば、両親が死んでから二週間も経っていなかったかもしれない。――彼女が、そう言っていたから。

あの日は、とても寒かった。

公園のベンチがやけに冷たかったことだけ、何故か鮮明に覚えている。

気づけば俺の側に、小さな女の子が立っていた。三、四歳だろうか。彼女は俺の後ろを見上げて、無表情に近い笑顔で言い放った。

「おとーさんとおかーさん、うしろ。ないてる。ごめんって」

それだけ言うと、少女はどこかへ行ってしまった。

どうして、このことを忘れていたんだろう。

ずっと忘れていたんだ。

俺も、彼女も。

4か月前

精神科の待合室で、俺はのんびりとテレビを見ていた。

精神科。その待合室といえば、どんなイメージをもたれるだろう。皆一様に俯(うつむ)いて黙りこくって、泣いてる人もいたりして、この世の終わりみたいな場所……というわけではない。少なくとも、俺の通っている精神(ここ)科の待合室は、内科のそれと大差なかった。

『精神科・心療内科』という看板を掲げているここが、精神科なのか心療内科なのか、俺には分かりかねる。いやまずその前に、精神科と心療内科の違いもよく分かっていない。

そしてぶっちゃけ、そんなことはどうでもよかった。

俺はテレビから視線をそらし、さほど広くない待合室をぐるりと見渡した。夕方四時、いつもなら割と混雑する時間帯だが、今日はそうでもなかった。俺の他に、待合室にいる患者は四人。その一人一人を、俺は素早くチェックした。

一人目は二十代後半くらいの若者で、携帯をいじっている。お洒落なパーカーに腰パンという今時の恰好をしていて、見た限りでは『一般的な』男性だ。

二人目は、イヤホンで音楽を聞いたまま、ぼんやりと壁を見つめている女性。年齢は二十代前半だろうか。時々、鞄の中から携帯電話を取り出して、時刻を確認している。

三人目は、病院に置かれている雑誌に目を通していた。年齢は四十代半ばほどで、男性。読んでいる女性向けの週刊誌には（残念ながら、この病院に置かれている雑誌のレパートリーは少ない）、表紙に赤いマジックで『持ち出し厳禁』と書かれていた。

四人目。俺はその子の姿を見て、心臓がとび跳ねるのを自覚した。今まで何度か見かけたことのある、その顔。

腰まである、長くて艶（つや）やかな黒髪。一言で言うなら、整った顔。けれどその目はどこか虚ろで、いつも宙の一点を見つめている。目の色は茶色と焦げ茶色の間くらい。――彼女の瞳の色を、俺は表現できない。

初めて見かけたその日から、彼女のことがずっと気になっていた。機会があれば声をかけてみたい、とも。ただ、問題点が一つ。

今日もそうだが、彼女はいつだって制服姿だった。黒を基調としたセーラー服。見覚えのあるそれは、この近くにある中学校の制服のはずだ。――そう。つまり彼女は、中学生だった。

対する俺は二十七歳。学生ですらない。声をかけづらい理由は、これだった。

俺がこの精神科に来たのは今から二年前、二十五歳の時だった。仕事によるストレス、そこからきた『鬱病』というのが俺の病名。会社を休み、自宅療養と薬物療法をしましょうというのが主治医の

判断だった。

俺が通院し始めた時にはもう、彼女もこの病院に通っていた。そのころから、一人で。

当初、『精神科のお世話になるなんて……』などと考えていた俺は、待合室の椅子に座っている彼女の姿に目を丸くした。

誰にも顔を見られないよう俯いて、猫背になっている自分が馬鹿らしいと思えるくらい、彼女は堂々としていたから。

「今時、鬱病なんて誰だってなるよ！」

世間ではそう言われ出したものの、いざ通院するとなるとやっぱりいろいろ違うのだ。近所の目というか、周囲の目が気になって仕方がない。……これも、症状のうちの一つなのかもしれないが。

二年間病院に通い続け、俺はようやく社会復帰目前のところにまで来ていた。職場の人間は優しく、『ゆっくり戻っておいで』と言ってくれた。近々、復帰の挨拶に行きたいと思っている。

俺はテレビから流れているクリスマスソングを聞きながら、今年のクリスマスも独りでケーキを食べる羽目になるんだろうなと考えていた。

「職場復帰は来年度、四月からでいいでしょう。約四カ月後ですね」

主治医のてるてる坊主にそう言われ、俺は嬉しさ半分、不安半分で診察室を出た。ちなみに（もちろんというか）、主治医の本名はてるてる坊主などではない。俺が勝手にそう呼んでいるだけで、その由来は……彼の頭頂部が『てかてか坊主』だったからだ。

――四か月後か。二年ものブランクがあるのに、うまく働けるだろうか。

そんな不安も抱えつつ、俺は待合室の椅子に腰かけた。この病院は規模こそ小さいものの薬局を併設しているので、薬を処方された場合は、わざわざ外の薬局に行かなくても院内で受け取ることができる。ただし、かなり待たされる時もあるのだが。

待合室には、俺と、例の女子中学生しかいなかった。他の患者は早々に診察を済ませて帰ったらしい。彼女も薬待ちだろうかと、俺はなんとなく、斜め前にいる彼女の方に目をやった。

目があった。

慌てて目をそらしたのは俺の方だった。まるで、授業中に好きな異性を覗き見ていた男子中学生のような反応。自分自身でもおかしかったが、彼女から見てもおかしかったらしい。忍び笑う声が聞こえてきたかと思うと、

「こんにちは」

向こうから声をかけてきた。

「あ、えっと、……こんにちは」

「ここでよく会いますね。診察のペースは二週に一回ですか」

彼女は臆することなく、俺に話しかけてきた。逆に、彼女よりも年上のはずの俺は、完全にパニック状態だった。

「あ、まあ、そんな感じ」

そんな感じってどんな感じだ。彼女は俺の慌てっぷりを見て、ほほ笑んだ。

「……もしかして、お話しするの苦手ですか？」

「や、そんなわけじゃなくて」

会話する相手が君だから緊張してるんだ、とはさすがに言えなかった。

「よかった。話しかけないほうがよかったのかと思いました」

その時、薬局からしゃがれたおばさんの声で「シンドウさーん」と呼ばれるのが聞こえてきた。彼女は返事をせずに立ち上がる。

『彼女の苗字はシンドウ』という情報を、俺は頭に叩き込んだ。

彼女が薬局で貰ってきた薬の量を見て、俺は驚きを隠せなかった。袋の数を確認したわけではないが、十種類はあるんじゃないか。それらを鞄に放り込む彼女に、

「君も二週に一回、ここに来てるの？」

尋ねてみると、彼女はうっすらとほほ笑み首を振った。

「私は週一、ですよ。……驚きました？　薬の量」

驚いたよと素直に肯定はできなかったが、黙りこむ俺を見て、彼女はふっと笑った。

「主治医が薬好きなのと、私自身に色々症状が出ているせいもあって、どうしても薬の量が増えるんです。不眠、抑鬱、パニック。幻聴幻視その他もろもろ」

「……そうか」

としか返せない自分が酷く情けなかった。

その時ちょうど俺の名前も呼ばれて、俺は自分の分の薬を受け取った。抗鬱薬が数種類と、睡眠薬。全五種類。これでも多い方かと思っていたが、俺の二週間分の薬の量は、彼女の一週間分のそれよりも少ないように見えた。

彼女は俺の投薬袋を見ても、薄い笑みを浮かべているだけだった。

病院から一歩外に出ると、冷たい外気が頬に突き刺さった。スカート姿の彼女は、脚も寒いだろうなと考える。しかし彼女は寒いと声を出すでもなく、紺色のマフラーを首にしっかりと巻きつけると、

「それじゃ、また二週間後に。……ヤマデラさん」

白い息を吐き出しながらそう言って、こちらに手を振った。

俺と同様に、彼女も俺の苗字だけを覚えてくれたようだった。

3か月前　（1）

恥ずかしながら、俺は統合失調症のことをよく知らなかった。だから、例の女子中学生……シンドウさんに、

「私、統合失調症なんです」

とカミングアウトされた時も、正直よく分からなかった。それよりも、彼女がそうやってさらりと自分の病名を口に出したことに驚いた。

大抵の患者は、自分の病気や症状について、話したがらなかったから。

「そうなのか。……えーっと」

「ああ、山寺さんは無理に言わなくていいですよ、病名とか。私が勝手に言っただけ」

彼女は相変わらず、薄い笑みを浮かべていた。

彼女と初めて話したあの日から、一か月が経っていた。前回別れる時に「二週間後に」と言われたものの、すれ違ってしまったらしくて会えなかったのだ。気づけば年も明けていて、彼女と待合室で再会した時の挨拶は「明けました、おめでとう」だった。

「学校は？　もう始まってるの？」

薬を待つ間に当たり障りのない話でもしようと、俺が質問してみると、

「始まりましたけど、登校する気はあまりありません。保健室登校だし、行っても特に楽しくないので」

……当たり障ってしまった感じがした。

気まずさのあまり沈黙した俺。何も言わない彼女。

テレビの音だけが、待合室に響く。

「――消してください。いや、チャンネル変えてください」

そんな中、シンドウさんがふいに口を開いた。

自分の膝の上にある鞄、そこにつけてある熊のマスコットを見ながら。

「え？」

「テレビ」

彼女に言われてテレビを見ると、ちょうど夕方のニュースが始まったところだった。番組トップは、三日前に起こった一家惨殺事件についてだ。黄色いテープと青のビニールだけが浮いているように見える、それ以外は何の変哲もない一軒家が、斜め上のアングルから映し出されていた。

「……嫌いなの？　テレビ」

俺は質問しながら立ち上がり、チャンネルをいじった。待合室にあるテレビは、患者がチャンネルをいじってもいいことになっている。俺が適当にまわしたチャンネルでは、数年前に大ヒットしたドラマの再放送をしていた。

彼女はちらりとそのドラマを見てから、またもや熊へと視線を戻した。

「嫌い。いや、テレビは嫌いじゃないんですけど。ニュース。いや、政治とかは大丈夫なんです。だめなのは殺人。いや、殺人じゃなくても人の命がなくなったようなの、です。ドラマじゃなくて。小説でもなくて。本物の死。誰かの。命が終わった場所。事故、事件」

「……別に、敬語じゃなくていいよ」

怪しげな敬語と言葉を聞いて、俺の笑顔はひきつった。彼女は熊のマスコットをいじったまま、視線を上げようとしない。まるで熊に言い聞かせているかのように、……独り言のように、話を続ける。

「あれが見えるから嫌い。あれが見えやすい。現場を映すのやめてほしい。どうして取材するかな。なんで気付かない。なんで皆、聞こえないんだろう。あんなはっきり、叫び声、猫みたい、いや、もっと。もっとこう」

「えーっと、あの」

「シンドウさーん」

薬局に名前を呼ばれた途端、彼女の独り言はぴたりと止まった。それからこちらを見て、いたずらっぽく笑った。

「……いま、ちょっと引いたでしょ。山寺さん」

「え？」

「山寺さーん」

ちょうど俺の名前も呼ばれ、二人で仲良く立ち上がった。

「誰が差別をしているのか」

帰り道、一か月前と同じ紺色のマフラーをした彼女が、俺の隣で呟いた。どこかでお茶でも飲まないかと誘ったのは俺で、ハンバーガーショップのアップルパイが食べたいと言ったのは彼女だった。ということで、病院から一番近いバーガーショップに向けて二人で歩いている時、彼女が不意にそんなことを言った。

「え、なんて？」

二十七の俺が、中学生をお茶に誘うのはまずかったんじゃないかと思いつつ、俺は出来る限り明るい声で返す。周りから見たら、年の離れたカップルどころではない気がする。

彼女は今日も制服姿だ。もしも同じ中学の生徒や教師にこの現場を見られたら、彼女の立場はまずくなるかもしれないと思った。

「――私たちは、弱者？」

身長百五十センチほどだろうか。百七十五センチの俺から見たら、彼女はひどく小さく見える。俺は眉をひそめながら、彼女の次の言葉を待った。

「私たちは弱者なのだと、本人たちが言う。なのに、区別されると差別されたと言う。都合のいい区別(ごと)だけ受容して、他の区別は差別だと言いはる。『あちら』はあちらで、手をこまねいている。『こちら』のことを弱者だと思っているのかどうかは、知らない。ただ、『こちら』が少しでもおかしな行動をとれば、それは病気のせいだと考える。病気という言葉におさめて、納得しようとする。おかしいね、笑っちゃう」

……俺は、彼女の言葉の一割も理解できなかった。彼女は一人でくつくつと笑う。しかしその笑い声が、何かのスイッチでも切ったかのようにプツリと途切れた。

「山寺さん、幽霊って信じる?」

彼女の声はどこまでも澄んでいて、真剣だった。しかし、いきなり方向転換する話題に、俺はついていけずに振り回される。

「えっと?」

「幽霊って信じる?」

同じ質問を二回され、俺は返答に困った。残念ながら俺には霊感がない。いるかいないかと訊かれれば、正直なところ

「信じてないんだね。その様子だと」

俺が答える前に、彼女の方が言い当てた。相変わらず、うっすらとした笑みを浮かべている。彼女が心の底から笑っている顔を、俺はまだ見たことがなかった。

「……心霊特集で、霊能力者が出てくるでしょう。お祓(はら)いしたりする」

彼女は心持ち首をかしげながら、俺の方を見上げる。ちょうどその時、数メートル間隔で植えられている街路樹が、一斉に光り出した。空はまだ薄明るいのに、青色の人工的な光が点滅する。彼女は幽霊の話を中途半端なところで区切ると、

「――これ、夕方四時になったら光るように設定されてるんだね。もう十二月も終わったのに。クリスマスは関係ないのか。……冬の間はずっと、この調子かな」

青白く光る木を見上げて、ため息をついた。

「光が冷たい。……なにもしなくてもね、木は綺麗。なのに、それを黒いコードでぐるぐる巻きのがんじがらめにして、人工的な明かりをつけて。――何が楽しいのか、私には分からない」

そう呟いた彼女の背後から、イルミネーションが綺麗だと騒ぐ女

子高生の声が聞こえてきた。

3か月前　（2）

夕方のバーガーショップは、高校生で賑わっていた。騒がしいと言い換えてもいい。ガラス戸から店内を覗いてみると、客のほとんどは高校生だった。皆、同じ制服を着ている。この近くに高校があるらしい。

ゲラゲラと品のない笑い声を出す男子高校生を見て、シンドウさんは眉をひそめた。

「……人ごみ、苦手？」

少しだけこちらに近づいてきた彼女に、俺はこっそりと問いかける。彼女は首を振り、

「人ごみと言うよりも、こういう笑い声が嫌い」

誰にも聞こえないような小さな声で、そう言った。

結局、アップルパイとドリンクをテイクアウトして、二人で外に出た。寒いけど大丈夫？　と訊いてきたのはシンドウさんで、俺は平気だよと笑った。実際、分厚いコートを着ている俺よりも、スカート姿のシンドウさんの方がはるかに寒そうだと思った。

バーガーショップの近くにあった小さな公園に、二人で足を踏み入れる。園内には小学生が3人いるだけで、その子たちも俺達と入れ違いで出ていった。

鉄棒に滑り台、ブランコ、シーソー、古ぼけた木製のベンチ。彼女が率先してブランコに向かったので、俺はそれに続いた。

ブランコに座り、アップルパイとホットコーヒーを彼女に渡す。彼女は礼を言ってそれを受け取ると、アップルパイの封をあけた。

俺は自分用の紅茶を取り出す。……が、出てきたのは、ただのお湯入りカップだった。目を丸くする俺に、シンドウさんはほほ笑む。

「ティーバッグ、入ってなかった？」

そう言われて紙袋の中を確認すると、底の方から安物のティーバッグがひとつ出てきた。

――今までコーヒーしか注文したことがなかったから、たまには紅茶でも飲んでみようかと思ったものの、

「……しょぼい。俺もコーヒーにすればよかった」

俺が素直にそう言うと、彼女はくすくすと笑いながらアップルパイを一口食べた。俺はしぶしぶ、安物のティーバッグを湯につけて泳がせる。バッグから徐々に、紅茶の色と香りが漂いはじめた。その時だった。

「――私には幽霊が見える」

彼女ははっきりとした口調で、そう言った。

彼女の言葉と同時に、冷たい北風が吹いた。俺は両手で紅茶のカップを持ち、彼女の方を見る。彼女は相変わらず、どこを見ているのか分からない目をしていた。

「山寺さんは、幽霊を信じていない。けれど、『私は幽霊が見える』。……私の話、本当だと思う？」

沈黙する俺の方を見て、彼女は笑った。雪女を彷彿させる、そんな笑みだった。

「心霊番組によく出てくる霊能力者。あれはインチキだと思うでしょう。それじゃあ私は？　精神科に通っている私は？　精神科に通っている人間が、幽霊が見える、声が聞こえると言ったら？」

彼女は俯き、小さく肩を震わせた。それは寒いからでも、泣いているからでも、なくて。

「ただの幻覚。それが担当医の判断だったし、両親の意見も同じだった」

彼女が声を押し殺して、笑っているからだった。

しばらく、言葉のない時間が続いた。俺が紅茶をすする音と、彼女がアップルパイを食べる音が少し聞こえるくらいの、静寂。それを破ったのは、彼女の方だった。

「信じる信じないは、自由。私が精神科に通っていることも、『壊れて』いることも、本当だから。……あ。言い方が悪かったね、ごめん。壊れているっていうのは、あくまで私の話」

同じ精神科に通っている俺のことを、そして『壊れている』と表現したことを気にしたらしい。謝る彼女に、俺は首を振った。

「君は壊れてなんかない。……幽霊のことは、俺は専門外だから分かんないけど。君は」

「あなたには分からないでしょう？」

俺の言葉を遮って、彼女は言いきる。

「知らないでしょう？　私のこと。君はまだ若いから大丈夫、っていうかもしれない。でもね、もう遅いの。私は壊れてる。ううん、壊れてた。はじめから。欠陥品で、不良品。修理なんてできない」

彼女の声は、諦めているというよりも、事実をただ淡々と話しているだけのようだった。

「……昔から、幽霊が見えてたの？」

俺が尋ねると、彼女は前を向いたままほほ笑んだ。ホットコーヒーを一口すすり、ため息交じりに言う。

「子供のころから、ずっと。けれど物心ついた時から、そのことは隠して生きてきた。精神科に通いはじめたころ、うっかり口を滑らせたけどね」

「誰も信じてくれないの？　君の話」

俺の言葉に、彼女がようやくこちらを向いた。

「優しいね。私の『妄想』に付き合ってくれるんだ？」

「――だけど君自身は、その幽霊を『本物』だと思ってるんだろう？　なら、本物ってことでいいじゃないか」

「……変わった人」

彼女は笑わない。俺ははたと思いつき、恐る恐る彼女に尋ねてみた。

「――俺の両親、もう死んでるんだ。……どうかな。幽霊とか、見える？」

「見えない」

彼女はきっぱりとそう言って、コーヒーを飲みほした。いや、最後の一口分だけ残してある。俺もよく知っているが、この店のコーヒーは、底の方だけやたらと粉っぽくて苦いのだ。

彼女はこちらを、更にその背後を見て、もう一度、

「見えない」

そう言い放った。俺は後ろを振り返る。そこには、『黒いコードでぐるぐる巻きにされていない』桜の木しか見えなかった。

「……守護霊とか、そういうのはいないのかな？」

俺が尋ねると、彼女は首を振った。

「私は見たことない。あのね。死んだ人間の魂って、二週間程度で『消えちゃう』の」

「消えちゃう？」

「成仏、っていうのかな。とにかく、私には見えなくなる」

無表情のまま、首をかしげる彼女。どうやら、『消えちゃう』ことについては彼女も詳しくないようだった。

「二週間程度って言ったけれど、私が知っている限りでは死んだ日からちょうど二週間で消えちゃう。私のお爺ちゃんもお婆ちゃんも、ガンで死んだ叔母さんもそうだったし」

彼女はそこまで言うと、残っていたコーヒーを土の上に流した。乾いた土は一瞬だけコーヒーをはじき、けれどもすぐにそれらを吸収していく。土の上に残った黒いシミとコーヒーの粉を見て、彼女はおかしそうに笑った。げらげらでも、くすくすでもなく、無言で。

「山寺さんのご両親が本当に亡くなってるのなら、二週間以上前に亡くなったのね。二週間以内に亡くなったのだとしても、あなたに『憑いてない』可能性もある。親の幽霊がいつも、子供の側に憑(いる)くとは限らない。フラフラどこかに行っちゃう幽霊もいるし。……もしくは」

彼女は地面のシミから顔をあげて、こちらを見た。

「私のことを試すために、山寺さんがカマをかけたのか。実際、ご両親はまだ生きてたりして、ね」

俺が顔をしかめると、彼女は首を振りながら言った。

「いいの。そういうの、慣れてるから」

「……俺の両親は、本当に死んでるよ。俺が高校生のころに」

俺が小さな声で告げると、彼女は「そう」とだけ答えた。

彼女が俺のことを信用してくれたのかは分からないが、俺の両親が十一年前に死んだのは、紛れもない事実だった。

2か月半前　（1）

Ｆｒｏｍ：高田望
Ｓｕｂ：まだまだ寒いね

風邪とか引いてない？
会社で、風邪が流行ってるの。
山寺君も気をつけてね。

復職、近いって聞いたよー。
楽しみにしてるけど、無理はしないでね。

俺は寝ぼけ眼（まなこ）で、彼女からのメールを読んでいた。寝ぼけていると言っても、今の時刻は昼過ぎだ。恐らく、昼休みを利用してこのメールを送ってくれたんだろう。

高田望（たかだのぞみ）は俺と同い年の同期で、……高校時代の恋人だった。

俺の両親が通り魔事件で死んだあとも、彼女は俺のことを支えようとしてくれた。――けれど、別れてくれと頼んだのは俺の方だった。

「私じゃ、だめかな」

あの時、彼女は泣き出しそうなのを必死に堪えていた。

「私じゃ、君を支えられない？」

そうじゃない。ただ今は、誰かと付き合うとか、そういうのは考えられない。ごめん。

そう返した覚えがある。

結局彼女は女子大に、俺は国公立に進学し、離れ離れになった。もう二度と、会うことはないだろう。そう思っていた。

だから彼女と再会した時、俺は凝り固まった。いや、彼女も凝り固まっていた。再会場所は、社員食堂。――本当に偶然だったのだが、同じ会社に就職していたのだ。

「――……元気にしてた？」

声をかけてくれたのは、彼女の方だった。

「まあね。そっちは？」

「元気だったよ。ありがと」

よりを戻したというわけではない。けれど、高校時代に出来た亀裂は、少しずつ埋まっていった。……亀裂を作ったのは俺で、修復してくれたのは彼女だったけれど。

その後、俺が『体調を崩して』休職すると話した時、彼女は心底複雑そうな顔をした。恐らく、高校時代のことを思い出したんだろう。

「……たまに、メールしてもいいかな」

遠慮がちにそう言われて、俺は笑った。歪ではあるが、その時の俺に出来る精一杯の笑顔だった。

「ああ。そうしてくれると助かる」

そうして約十年ぶりに、彼女とメールアドレスを交換した。

『元気だよ、ありがとう。もうすぐ会社にも挨拶に行くから』という趣旨のメールを返信して、俺は携帯を閉じた。十三時過ぎ。のそのそと布団から這い出ると、洗面台へと向かった。

今日は、通院日だった。

休職してから通いはじめた病院は、土・日・祝日は休みで、平日も十七時までしか診察していない。今はいいが、復職すると通えなくなる。夜間診療、もしくは土日も診察している病院を紹介しましょう、と言われるのはある意味当然の流れだった。

顔を曇らせた俺を見て、担当医のてるてる坊主は笑った。

「安心してください、良い医者を紹介しますから」

残念ながら、俺が心配しているのは担当医が代わることではなくて、彼女と、――シンドウさんと会えなくなることだった。

診察室を出ると、待合室のソファーに座っている彼女の姿が見えた。眉間にしわを寄せて、一点を見つめている。彼女の視線の方に目をやると、『大型トラック歩道に乗り上げ　園児五人が死亡』というテロップが、その背後に事故現場が映し出されているのが見えた。俺は無言でテレビに近寄り、チャンネルを変えた。

「……泣いてた」

待合室には、俺と彼女しかいなかった。彼女は俺に向かって言っているのか、独り言なのか分からない口調で呟く。

「子供たち、泣いてたよ。痛かったって。即死じゃなかったのね。怖かったって」

「声まで聞こえるのか」

「うん」

彼女は俯くと、鞄につけている熊のマスコットをいじり始めた。八センチほどの黒い熊のマスコットには、腕や頭に包帯が巻かれていて痛々しかった。

「……それ、どうして包帯を巻いたの？」

俺が尋ねると、彼女が顔をあげた。その瞬間は無表情だったが、俺と目が合うとほんの少しだけ微笑んだ。

「私が巻いたんじゃない。はじめから巻かれてたの。最近流行ってる、これ。眼帯してるのとか、絆創膏貼ってるのとか、ギプスして松葉杖ついてるのとか」

「……へえ」

最近の若者の趣味は分からないと思いつつ、俺は彼女の隣に腰掛けた。彼女はマスコットをいじる手を止めると、相変わらず声は出さずに笑った。

「包帯しても眼帯しても絆創膏貼ってもギプスしても、痛いのは変わらないのにね」

ちょうどその時、薬局から二人同時に名前を呼ばれた。

「今更だけど、シンドウさんって中学何年？」

帰り際、マフラーを巻いている彼女に尋ねると、

「中学三年。本当は受験生。来年はフリースクールに行く予定」

俺の次の質問も見越したような回答が返ってきた。俺は思わず苦笑する。彼女の言葉は常に簡潔で率直で、だからこそ分かりにくい時もあった。

――しかし、中学三年生か。十二歳差か。さっきの熊のマスコットといい、ジェネレーションギャップを感じる。

そんな俺の心情を察しているのかいないのか、マフラーを巻き終わった彼女はこちらを見あげてほほ笑んだ。……彼女の笑顔には、

『無邪気さ』がなかった。かといって、邪気があるわけでもない。どこか空っぽに見える、笑顔。

「山寺さんは、三十前？」

「……二十七」

「うん。そのくらいに見える。老けてない」

――これは、褒められているのだろうか。先ほどから苦笑してばかりの俺と、空っぽの笑顔を張り付けている彼女。周囲から見たら、どんな関係に見えるだろう。

そんなことを考えていたら、間抜けな電子音が俺のズボンのポケットから響いた。俺は慌てて携帯を取り出す。メールではなく、電話。かけてきたのは、――高田望だった。

「もしもし？」

メールはともかく、彼女が電話してくるのは珍しい。いや、初めてかもしれない。俺は若干緊張しながら、声を出した。

『あ、もしもし山寺君？　いま大丈夫？』

「ちょっとだけなら。なんなら後で、こっちからかけ直すけど」

シンドウさんの方に目をやりながら、俺は小声で返事する。シンドウさんは俺の方ではなく、黒いコードでぐるぐる巻きにされているイチョウの木を見ていた。

望は『ううん、すぐに済むから』と前置きした後で、

『直接会って話したいの。山寺君の都合のいい時、ないかな』

「……直接？　今じゃなくて？」

『――直接がいいな。私、電話嫌いだし』

ああ、だから彼女はいつだってメールだったのか。そんなことを思いつつ、俺は自分の頭の中にあるスケジュール帳を確認する。……通院日以外、これといって用事はなかった。むしろ、仕事をしている彼女の方が忙しいはずだ。

「望の都合に合わせるよ」

そう言われるだろうと想定していたのか、望はすぐに言葉を返してきた。

『明日の夕方とか、どう？』

「大丈夫だよ。駅前でいい？」

『うん。それじゃ、また明日』

電話を切ると、シンドウさんと目があった。イチョウの木を見ていたはずの彼女は、いつの間にかこちらを見ていた。

「大切な人、から？」

彼女にとって、『大切な人』の定義はなんだろう。

家族か、友人か、それとも。

「――まあ、そんなところかな」

俺が困ったように笑うと、彼女はふっと息を吐いた。それから、

「本当に変な人。でも、嫌いじゃない。――好き、かもね」

それだけ言うと、一人でさっさと歩き始めた。その後ろ姿が『ついてこないで』と言っているような気がして、俺は呆然と立ち尽くした。

2か月半前　（2）

望との待ち合わせ場所は、駅前のファミレスだった。社会人として、もっとお洒落な場所……せめてカフェで待ち合わせしろよと思ったが、『ファミレスがいい』と言ってきたのは望本人だった。

昔と変わってない。そう思った。

テーマパークや映画館を好んでいた同級生に対し、望がデートの時にいつも行きたがったのは近所の公園だった。小規模の割に、遊具だけは豊富にある公園。望はその中でも、大きなスプリングの上に馬の模型をくっつけたような遊具（もの）を特に好んでいた。

「わざわざメリーゴーランドになんて乗らなくても、これで十分だよ」

公園の近くにあるコンビニでコロッケを買い食いして、たわいもない話をして。

そんな時が何よりも幸せなのだと、いつも言っていた。

――彼女にとって大切なのは、コーヒーが『ドリンクバー』なのか、『豆から挽いたもの』なのかではなく、……俺と共有する時間そのものなのだろう。

「ごめん、待たせちゃったね」

彼女が店に入ってきたのは、約束の時間ちょうどだった。俺は首を振る。

「俺が先に着いただけだよ。それより、なにか食べる？」

「うーん。とりあえず、飲み物だけでいいや。山寺君は？」

「俺も飲み物だけでいい。腹が減ったら、なんか注文するよ」

彼女は向かいの席に座ると、ドリンクバーを二つ注文した。俺はさりげなく、彼女の姿を確認する。俺が休職する前、ショートボブだったはずの彼女の髪の毛は、いつの間にかすっかり伸びている。長さは、肩と腰の中間くらいだろうか。少しだけ染めているらしく、若干赤みがかっている。――それ以外は、何も変わっていなかった。

ナチュラルメイクを通り越し、薄化粧とすら言えないくらいの化粧。顔は、猫で例えるならアメリカンショートヘア。可愛くて、けれど賢そうに見える。残念なのは、近視用の眼鏡が酷く似合っていないことだけだった。

「――……山寺君、変わってない」

「そうか？」

「そうだよ。高校の時と一緒。老けてないよ」

この前シンドウさんに同じことを言われたのを思い出し、笑ってしまった。望が首をかしげたので、なんでもないよと手を振る。しかし、ツボに入ってしまったらしく、笑いが止まらない。彼女はし

ばらく俺の笑う様子を見守り続け、

「――……よかった。笑えるようになったんだ」

やがて、ぽそりとそう言った。そこでようやく、俺は笑うのを辞める。

「本当に迷惑掛けたな。ごめん」

「心配かけたな、にしてくれる？　迷惑っていうと、君の存在が邪魔みたい。それは嫌」

望はそう言うと、ほほ笑んだ。

シンドウさんのそれとは違う、柔らかな笑みだった。

俺はカフェオレを、彼女はミルクティーを飲む。なんとなく気まずい沈黙。彼女は机に張り付けられた期間限定メニューを見ていたが、しばらくすると意を決したように顔をあげた。

「あのね、山寺君」

「……うん？」

「今、好きな人っている？」

単刀直入。俺は口に運ぼうとしていたカフェオレのカップを、机の上に置いた。

――好きな人と言われて、シンドウさんの姿が浮かんだ。それが

俺の答えで、でも言えなかった。
十二歳差、相手は中学生。そのことがどうしても、俺の中で引っ掛かっていた。

「……好きな人、いない？」

少しだけ上目遣いで、両手を膝の上に置いて、気まずそうに彼女が訊いてくる。俺はテーブルの端に立てかけてあるメニュー票を横目で見ながら、

「――付き合ってる人はいない」

半分隠した答えを返した。勘のいい望なら、恐らくその意味が分かっただろう。けれど彼女は続けた。

「……高校生の時、すごく後悔した。どうして君の手を放しちゃったんだろうって」

彼女の言葉も姿勢もまっすぐで、俺はそれに反比例するように猫背になった。後ろめたい。その言葉が一番しっくりくる気がした。

「今回のこともそう。会社を休む前に。もっと早く気付いてあげられなかったのかって、思った」

「――それは」

「私ね。まだ好きなんだ」

軽くめまいを感じる。どうしてこいつは、いつだって真っ直ぐなんだろう。付き合っていたあの頃、よくそう思った。そして、今日も。

「山寺君の、――高志のこと、まだ好きなんだ。馬鹿みたいだよね。中学生みたいだって笑ってくれていいよ。でも、まだ好きなの。……ねえ、」

彼女はまっすぐにこちらを見る。俺は、笑えない。

「私たち、もう一度やり直せないかな」

笑えなかった。

一人で歩く商店街は、酷く寒かった。

結局二人とも、何も食べずに外に出た。「呼びだしたのは私だから」と、俺の分のドリンクバー代まで望が払ってくれた。正直、自分が情けなかった。

すぐに答えを出せなかった。

彼女を受け入れることも、断ることもできずに、曖昧な返事でごまかした。

「待ってるから」

そう言ったのは彼女の方だった。

「返事、待ってる。急いでないから。友達としてでも、いいから。――ただの同僚、よりは格上げしてくれると嬉しいかな！」

最後の一言だけを明るい口調で言うと、望は駅に向かって歩き出した。俺は用事があるからと嘘をついて、ファミレス前で彼女と別れた。

駅前の商店街を、目的もなく歩く。

楽しそうな笑い声も、手を繋いで歩いている幸せそうなカップルの姿も、妙にわざとらしく見える。俺は両手をポケットに突っ込んで、猫背のまま無表情で歩き続けた。

包帯を巻いている熊のぬいぐるみが目について、ゲームセンターの前で立ち止まる。シンドウさんが鞄につけていた、例のマスコットだ。いろんな種類のそれが、ＵＦＯキャッチャーの中におさめられていた。

『包帯しても眼帯しても絆創膏貼ってもギプスしても、痛いのは変わらないのにね』

彼女の声を思い出しながら、俺は財布の中から百円玉を取り出した。

2か月前　（1）

骨折しているらしく、ギプスした右腕を三角巾で固定している。
――そんな熊のマスコットを、俺はシンドウさんにプレゼントした。二月の初め、世間がバレンタインで盛り上がり始めたころだった。
シンドウさんは怪訝な顔をして、熊のマスコットと俺を交互に見比べた。

「……どうしたの、これ」

「ゲーセンで、たまたま取れたんだよ」

ゲームセンターで取ったのは本当だが、彼女にプレゼントするために何度も挑戦したとは言えない。たまたま取れたなんて明らかに無理のある嘘だが、彼女は納得したのかすんなりと受け取ってくれた。おもむろに鞄を膝の上に乗せ、『包帯熊』の隣に『骨折熊』を取りつける。――なんともシュールな、鞄になった。

「ありがとう」

彼女が綺麗な顔でほほ笑んだので、俺も笑いかえした。待合室のテレビは、くだらないバラエティー番組の再放送を映し出していて、けれどもそのおかげで彼女の眉間にしわが寄ることもなかった。ニュースをやっていたら、俺がチャンネルを代えに行くところだ。

待合室で薬を待っている間、俺は近々転院することを彼女に伝え

た。復職したら、この病院には恐らく来れなくなる、と。

「転院、いつから？」

彼女が骨折熊をいじりながら、抑揚のない声で訊いてくる。その声は、寂しそうでも嬉しそうでもなかった。

「――四月から。三月いっぱいで、ここはやめる」

「じゃ、会えるのはあと二カ月ね」

これまた寂しそうだというわけでもなく、ただ事実を確認するだけの口調。俺は内心がっくりしつつ、彼女がいじっている骨折熊を眺めた。今にも泣き出しそうに見える熊の顔は、どこか笑っているようにも見えた。

「山寺さん、今日はこれから予定ある？」

病院帰り、いつものように手際よくマフラーを巻きながら、彼女が訊いてきた。俺は首を振る。

「じゃ、コーヒー。私がおごる。百円の、安いの」

「え、なんで？」

「別に。気分。私も飲みたいし。それに、お礼。……これ、たまたまでも百円でもないでしょ」

彼女は骨折熊を指差して、笑った。俺は頭を掻く。
――バレてたか。
実際、その熊を取るのに八百円かかっていた。

前回は紅茶を注文したバーガーショップで、ホットコーヒーを二つ注文した。相変わらず学生が多くて騒がしい店内で、彼女は顔をしかめ
「外がいい」
そう言ったので、結局この前行ったのと同じ公園へと向かった。

閑散としている公園で、二人ブランコに座ってコーヒーを飲んだ。今回、彼女はアップルパイを買っていない。……と思っていたら、紙袋からチョコパイが出てきた。いつの間に注文したんだろう。いや、そもそも、あの店にチョコパイなんて置いてあっただろうか。
「これ、期間限定。バレンタインの。便乗してみた。――半分いる？」
相変わらず、俺の心を見透かしたような彼女の言葉と簡潔な説明。俺はチョコパイを見ながら首を振る。
「いや、いいよ。半分にするのは難しいだろ？　それ」

このバーガーショップの『アップルパイの中身のこぼれやすさ』は、俺の人生の中で堂々の一位だった。恐らくチョコパイも、似たようなものだろう。半分にするために手で千切ったら、悲惨なことになりそうだ。

彼女はチョコパイに目をやり、「それもそうだね」と返事をすると、小さな口で一口かじった。両手でパイを持ち、ちまちま食べるその様子は、まるでリスのようだった。

「……俺も中学生の時はよく、学校帰りにハンバーガーとか食べてたなあ。友達四人で、チーズバーガー五十個頼んでみたりしてさ。——俺も、『騒がしい学生』の一人だったよ。色々と馬鹿なことやった」

俺が笑うと、彼女の手が止まった。無表情のまま、こちらに目を向ける。

「——……いつ？」

「え？」

「あなたが『変わった』のは、いつ？」

目を見開く俺と、表情を変えない彼女。目の色は相変わらず、茶色と焦げ茶色の間、——深い茶色。

視線はやがて、俺からチョコパイへと戻った。

「あなたが通院し始めた。それよりずっと前。違う？」

彼女の言った単語を、頭の中で組み立て直す。

『あなたが通院し始めた二年前。あなたが壊れたのは、それよりももっと前。違う？』

――ああ。多分、俺が『壊れた』のは高校生の時だろう。
両親が通り魔に襲われて殺されたあの時から、俺は変わった。
壊れたとも、破滅したとも言える。

彼女は俺の返事を待たずに話を続けた。相変わらず、抑揚のない声色で。

「本当は、あなたは『そういう人間』じゃなかった。何かあった。そして変わった。……戻りたい？」

「それは、過去に戻りたいかってこと？　戻りたいよ」

気づけば、彼女のことを睨んでいた。彼女はひるまない。俺は湧き上がってくる言葉を、取捨選択せずにそのまま口にした。

「あの日に戻って、両親には外に出るなって言いたい。犯人を刺し殺したい。俺の親を殺したのと同じ包丁で、あいつの喉を切り裂きたい。――いや。あいつじゃなくて、あいつの家族を」

「できないよ」

言葉を遮られてようやく、我に返った。急に感じる右手の痛み。いつの間にか、持っていたホットコーヒーのカップを握りつぶし、

中身を思いっきり周囲にぶちまけていた。コーヒーのかかった右手は若干赤くなっている。彼女は鞄の中からウェットティッシュを取り出し、俺の方に差し出した。

「――俺が、あいつを殺(や)れないって？」

「そうじゃない。過去には戻れないってこと。今を生きるしかない。受容して。もちろん、全てを受け入れろって言ってるんじゃない。そんなの無理。神様だって、受容できないものはきっとたくさんある。そんなものなの。この世界は」

ウェットティッシュを受け取ろうとしない俺を見て、彼女はため息をつくと立ち上がった。いつの間にか、チョコパイは食べ終えている。

「――……だから、両親の幽霊は見えるかって訊いてきたのね。あの日」

彼女はウェットティッシュを、俺の右手にあてがった。ひんやりとしたティッシュ、それとは対照的な彼女の手の温かさに、どきりとする。

「山寺さん。前にも言ったけれど、私には見えない。幽霊、二週間で消えちゃうから。あなたの両親の幽霊は、私には見えない。でもね」

深い茶色が、こちらを見据える。すこしだけ歪んだ、その瞳で。

「あなたの現状を、悲観していない。――誰も」

彼女の言葉に、俺は息をのんだ。

2か月前　（2）

会社にも行けなくなり、精神科通い。まともに食事もとらず、風呂にも入るのも億劫。一晩中声を押し殺して泣いて、朝になってようやく眠る。そんな生活。

自分が『こうなった』原因を、全て他人に押し付けようとした。

仕事のストレスによる、鬱病。でもきっと、それだけじゃない。

高校生のころから抱えてきたものが、破裂した。きっとそうだ。

――犯人を殺してやろうかとも考えた。

天井の一点を見つめて、数時間を過ごす。馬鹿みたいに。ただただ時間を浪費して、死ぬのを待つ。包丁を見つめながら、それで犯人を刺し殺す自分を、そのあと自決する自分を想像する。笑う。

そんな俺のことを、死んだ両親はどう思っているのだろうかと考えた。

「心配は、してると思う」

目の前に立っていたはずの彼女は、俺の隣のブランコに座りなおしていた。彼女は俯いたまま、ブランコを少しだけ揺らす。彼女の

言葉も、揺れる。

「でもね、山寺さん。親は、子供のことを簡単に諦めない。そういうものなんだって。……多分、山寺さんの親も、そうだと思う。会ったことは、ないけど。あなたの親は、きっと」

あなたの、親は。

彼女の言葉には、どこか棘(とげ)があった。何かを、責めるような。けれどそれは、俺に向けられたものではなくて、もっとどこか、――別の。

「――私は世間知らずだし、あんまり言えない。えらそうなこと。でも、これだけは言いたい」

ブランコの揺れが止まると、時間も一瞬だけ止まった気がした。無表情、けれどもどこか寂しげな彼女と目が合う。深い茶色の瞳。それはまるで、

「山寺さん。――あなただけは、自分(あなた)のことを諦めないで。味方でいてあげて」

なにもかもを見透かしたような、けれど何も見ていないような、そんな色をしていた。

冷たい風が通り過ぎて、俺はそこでようやく現状を把握した。彼女は中学生で、辺りは真っ暗だ。……とりあえず今日は、家に帰さないと。

俺は立ち上がり、彼女に手を差し伸べようとして、――右手が軽く痛むことに気がついた。そういえば、右手に思いっきりホットコーヒーをこぼしたんだった。多少、火傷したのかもしれない。俺は差し伸べていた手をポケットに突っ込み、彼女に向かって笑いかけた。

「ごめん、送っていくよ」

彼女は俯いたまま、首を振った。紺色のマフラーをしっかりと巻き直して、こちらを見上げる。

「帰れるから。大丈夫、私は一人で」

「いや、危ないし送るよ。ここら辺、結構物騒だから」

「本当に大丈夫。慣れてるから、こういうの。家、ここから近いし」

彼女は立ち上がると、鞄を肩にかけた。新品のように見える、スクール鞄。それはきっと彼女が丁寧に扱っているから、――ではなくて。

「……君の味方は？」

鞄につけられている骨折熊と包帯熊を見ながら、俺は尋ねる。既に歩きはじめていた彼女が、こちらを振りかえった。

綺麗なスクール鞄。それはきっと、――あまり使われていないか

ら。

学校に、君の居場所は？

君の、味方は。

「……さあ？」

彼女ははぐらかすように笑い、肩をすくめた。

「私の味方、か。少なくとも、家にも学校にもいない。――ううん、拒絶してるだけかもね。私が」

「だったら、」

俺が君の。そう言いきる前に、彼女はこちらに手のひらを向けた。

これ以上何も言うな、の合図。

口をあけたまま絶句する俺に、彼女はうっすらと笑いかけた。

「言ったよね、いま。拒絶してるの、私。だから、いい」

それに、と彼女は付け足す。

「山寺さん、『大切な人』がいるでしょう？」

「それは……」

「私は大丈夫。慣れてるから」

風が、シンドウさんの長い髪を揺らす。彼女は目を細めた。

「――夜道を一人で歩くの、私は慣れてるから」

それだけ言うと、彼女は踵を返した。

自宅に向かって歩き始めた俺の足を止めたのは、携帯の着信音だった。

望からではない、とすぐに分かった。

彼女は、返事を待っていると言った。恐らく俺が返事をするまで、連絡してこないだろう。望は、そういうタイプの人間だった。

案の定、着信は望からではなく、大学時代の友人からだった。電話ではなく、メール。

結婚するから式に参加してほしい、という趣旨の。

俺は返事をせず、携帯をポケットに突っ込み再び歩き出した。

「――……結婚、か」

友人の幸せを、素直に喜べない自分が鬱陶しかった。

俺が気になっている相手は、まだ法的にも結婚が許されていない。なんてことを考えて、俺はぶるぶると首を振った。

彼女にとって、俺はただの『通院仲間』に違いない。

『私たち、もう一度やり直せないかな』

望の言葉が、頭の中で自動再生される。――望のことを嫌いになったわけではない。いやむしろ、嫌いになっているのなら、こんなにも悩まない。

悩んでいるのは、俺がいまだに彼女のことを好きだからだろう。

「……おっかしいな。俺、浮いた話とは無縁のはずなんだけど」

俺は頭を掻きながら、家の扉を開けた。

一人暮らしにしては広い家。

高校二年生のあの日までは、三人で暮らしていた家。

そう。この家は、三人で住むにはちょうどいい広さだった。

広い家に一人でいると、孤独が浮き上がる。空気中から寂寥感だけが分離して、身体中を支配する。

それでも、俺がこの家に住み続ける理由。

台所に立つ母の姿が、新聞を広げながらテレビを見ている父の姿が、見えるんじゃないか。

二人はまだ、ここにいるんじゃないのか。

そんな気が、したから。

『幽霊、二週間で消えちゃうから』

抑揚のない彼女の声が、頭をかすめた。

1か月半前

望とファミレスで話をしてから、一カ月近くが経とうとしていた。いまだに、あの日の返事をしていない。どうしたものかと考えながら、俺は精神科の待合室でテレビを観ていた。冬にしては珍しく、心霊特集をやっている。――といっても、夏にやっていた番組の再放送だが。子供だましのような、作り話としか思えない『実話』が次々と出てくる。わざとらしく悲鳴を上げるアイドルに、俺はため息をついた。

「山寺さん、観るんだ。そういうの」

背後、……というよりも頭上から声が聞こえてきて、俺は思わずのけぞった。

俺の後ろに立っていたのは、やっぱりシンドウさんだった。今日は制服姿ではなく、灰色のセーターの上に、黒のダッフルコードを羽織っている。

子供だましとしか思えない番組を観ていたことが恥ずかしくなった俺は、頭を掻いた。

「……観てたというか、たまたまこのチャンネルがついてただけだよ」

「そう」

彼女は特に躊躇(ためら)いも遠慮もせずに、俺の隣に座ってくる。俺は少しだけ彼女から距離をとって座りなおし、視線をテレビに戻した。

何年も前に別れた彼氏が生き霊になってあなたに憑いている、そんなことを霊能力者が至極真面目に話しているところだった。

「生き霊って、いるの？」

ふと思いついてシンドウさんに尋ねてみると、彼女は首を振った。

「分からない。私は見えたことがない」

「……死後二週間で、幽霊は『消えちゃう』んだって言ってたね。それってどんな感じなの？　だんだん透けていって、見えなくなる感じ？」

俺の言葉を聞いたシンドウさんは、黙りこんだ。

そんな彼女の様子を見て、興味本位で訊きすぎてしまったと後悔した。彼女としては、嫌な話題かもしれないのに。

しばらくしてから、シンドウさんは自然な動作でこちらを見た。考えが纏まった、――そんな顔をしていた。

「口の中。口内炎ができたとして」

「は？」

「口内炎。痛いやつ」

彼女が真面目な顔で口内炎と連発したので、俺は「はい。口内炎ですね」と真面目な返事をしてしまった。

「口内炎ができてる時は、気になる。痛いし。とんかつを食べるのが嫌になる。ソース、しみるし。サクサクのとんかつって、ささるし」

「うん」

「でも、いざ治ってみたら『口内炎ができていたこと』も『痛かったこと』も、しばらく忘れちゃうんだよね。あれ？　そういえば痛くないな……って気付いてようやく、治ってるんだって実感する」

「――まあ、そうかな」

「幽霊が消えちゃうのも、口内炎と一緒なの。見える間はすごく気になるのに、見えなくなったら、しばらくの間はその存在すら忘れちゃうような。そんなもの。案外」

「……ふーん」

そんなものなのだろうか。

人が死んでしまったら、生きている人間はしばらくの間でも、死んだ人間に『支配』される。故人との思い出にふけるようになる。

――同じ場所に行きたいと、思うようにもなる。なのに。

「幽霊は口内炎なのか」

俺が苦笑すると、彼女はいつものように熊のマスコットをいじり始めた。

「たとえが悪かったかも。分かりにくかった？」

「いや、分かりやすかったし面白かったよ」

「ならいい。――あと、一ヶ月半ね」

いきなり話題を切りかえられて、俺は首をかしげる。彼女は包帯熊の首を、俺と同じようにかしげてみせた。

「病院。違うところに移っちゃうんでしょ。この病院で山寺さんと会えるのは、あと一ヶ月半」

「――……ああ、そうだね」

彼女は俺の顔を一瞥して、すぐに包帯熊へと視線を戻した。それから、

「嬉しくなさそう」

憮然と、というよりも、ただの無表情と言った方がいいのかもしれない。表情こそ変わらないが、いつもよりも少しだけ機嫌の悪そうな声で、そう言った。

「――そうかな」

「無理してる？　復帰するの。本当は、嫌？」

「そんなことは、ないよ」

俺はテレビ画面に目をやりながら、笑顔を作る。

インチキとしか思えない心霊番組は、インチキとしか思えない霊能力者によって、アイドルに憑いている（らしい）生き霊を除霊し

ているところだった。「彼女から離れなさい」と責めたてる霊能力者、ボロボロと涙をこぼすアイドル。――この番組お決まりのパターンだな、とぼんやり思った。

俺はもう一度ため息をつくと、彼女の方を見て笑った。

「まあ、緊張はしてるかもしれないね。なにせ、二年ぶりだし。復帰する前に一度くらい、挨拶に行こうとは思ってるけれど」

「……そう」

テレビからは執拗に、「これ以上彼女を苦しめるな」と叫ぶ霊能力者の声が聞こえてくる。

――これ以上、苦しめるな。

会社に復職のあいさつに行く時、俺は望に返事をするつもりだった。気が重いのは、――重いように見えるのは、きっとそのせいだろう。

「……私は今日、さぼったの。学校」

彼女は熊のマスコットをいじるのを辞めて、テレビの方を見ながら言った。

「行くの、嫌だったから。もうすぐ卒業なのに、わざわざ休んだ。あとちょっとなんだから、我慢しろって思うでしょ。でも親は何も言わないの。……きっと、私とどう向き合えばいいのか分からないのね。私は腫れものだから。出来れば、見たくないような」

「……寂しい、の？」

男が女に「寂しいか」と訊くのは、ある意味下心がある。ただこの時は、他の言葉が思い浮かばなかった。

彼女はこちらを見ると、諦めたように薄く笑った。

「大丈夫。慣れてるから、そういうの」

――慣れてるから。

それは彼女の口ぐせのようで、けれども彼女がそれを言う時、俺はいつも思う。

それには慣れないでほしい、と。

「お待たせしました、シンドウさーん」

薬局に名前を呼ばれた彼女は立ち上がると、

「一ヶ月半は、短いね」

俺を見下ろしながらそれだけ言い残して、消えた。

1か月前

変な夢を見た。俺の両親が、殺される夢だ。
気味の悪い夢を見たなと思いつつ、俺は上半身を起こした。目をこすりながら、カレンダーを確認する。

「にせんいちねん、じゅうにがつ、じゅういちにち」

棒読みで、その日付を確認する。何度も何度も。

下に降りると、いつものように母が朝食を準備していた。お世辞にもうまいとは言い難い、そぼろのようなスクランブルエッグ。ぐずぐずに崩れたトマト。それを気にする風でもなく、新聞を読みながら朝食をとる父。

――ごめんね、食パン買うの忘れてて。今日はご飯よ。

母の言葉に、俺は笑う。だったら卵焼きと味噌汁にすればよかったじゃん、と言いながら席についた。スクランブルエッグを作ってから、パンがないことに気付いたのよと母。そんな母の笑顔を見ながら、俺は思い出したことを口にした。

――あ、そういえば。今日、変な夢を見たんだ。

へえ、どんな夢？　と楽しそうに訊いてくる母。……まさか、二人が殺される夢だとはいえない。

——詳しくは言えない。でもさ、今日一日、外に出るのは控えた方がいいかも。

——どうして？

——うーん、なんとなく。

俺がはぐらかすと、母は困ったように笑った。

——今日はね、お父さんと出掛ける予定があるのよ。高志が高校（がっこう）から帰ってくる頃には、お母さんたちも帰ってきてると思うけど。

母は困った顔のまま、スクランブルエッグを食べ始める。俺は少し水っぽいご飯と、……その日付をもう一度口にした。

「にせんいちねん、じゅうにがつ、じゅういちにち」

――……これで何度目だ、とため息をついた。布団の中でもそもそと携帯を開き、今日の日付を確認する。そしてそれを、わざと声に出した。

「二〇一二年、三月、二日」

……夢の中でくらい、「今日は外に出るな」ときちんと忠告すればいいのに。俺は布団からさっさと抜け出すと階段を降り、台所を確認した。

――父も母も、不格好なスクランブルエッグも、なかった。

自分で、スクランブルエッグを作る。ふわふわに仕上がったそれは、どう考えたって母の作ったそれよりも上手い。――けれど。

三人で食べた不格好なスクランブルエッグの方が、よっぽど美味かった。

「山寺さん。あと一カ月ね」

俺の顔を見るなりシンドウさんがそう言ってきて、思わず苦笑した。ここのところ、顔を合わすたびに復職までの日数を、……彼女と会えなくなるまでの日数をカウントダウンされている。シンドウさんにとってそれは、嬉しいことなのか、残念なことなのか。彼女

の表情からは、それを読み取ることができない。
待合室のテレビを確認する。「中学二年生　同級生を刺殺したのち自殺」というテロップと、映し出されている建物を見て、俺はチャンネルを代えた。

「どちらが悪かったのか」

彼女はテレビを凝視したまま、声を出した。チャンネルが代わったことに、気付いていないようにも見えた。

「いじめられてた子が、自分をいじめてた子を殺して、そのあと自殺したんだって。……誰が悪いの？」

どこか責めるような、彼女の声。俺は彼女の方に目をやる。深い茶色の瞳が、少しだけ濁っているように見えた。

「いじめられたら、我慢する。そしたらすべてが丸く収まる？　……壊れるよ、確実に」

「――君は、」

俺の声を遮って、シンドウさんは急に笑いはじめた。声を出して、酷く楽しそうに。
彼女のそんな姿を見るのは初めてで、俺は唖然とした。
シンドウさんはひとしきり笑うと今度は無表情になり、何度も繰り返し覚えさせられた台本を読むかのように、声を出し始めた。……まるで、念仏でも唱えるかのように。

「我慢してはいけません。誰にも言ってはいけません。やりかえし

てはいけません。見て見ぬふりしてもいけません。手を差し伸べてはいけません。標的にされてはいけません。負けてはいけません。折れてはいけません。勝ち負けではありません。黙っていては分かりません。声を出してはいけません。嘘つきの話は聞きません。泣いても何も解決しません。泣くのを我慢してはいけません。何もしてはいけません。――死んでください」

……彼女は息継ぎしたのだろうか。そんな間抜けなことを考えてしまうくらいに、彼女は早口で最後まで言いきった。

茫然としている俺の方にちらりと目をやったシンドウさんは、いつも通りの澄ました顔をしていた。

「いまの全部、直接言われたこと。本当の話。びっくりした？　……引いた？　山寺さん。私、壊れてるの。怖かった？」

彼女の試すような目を、俺は見つめる。――怖かったのは俺ではなくて、

「それを言われて、怖かったのは君だろう？　……他人を、拒絶したくなるくらいに」

ほんの少し、ほんの一瞬。彼女の顔が歪んだ。

俺の言葉に、いや、自身の言葉にシンドウさんは反応した。

いつか、彼女が言っていた言葉。

『拒絶してるの、私』

「――……俺のことも、拒絶する？」

怖がらせないよう、出来る限り柔らかい声で、彼女に尋ねる。

コーヒーをこぼした右手の痛みは、すっかりなくなっていた。……『消えちゃう』のも、こんな感じなのかもしれない。いつの間にか、いなくなっている。それはとても、

「こわい」

口にした言葉。その感情を乗せた声。いつもは平坦な彼女の声が、震える。

「分からないの。人を信用していいのか。大丈夫なのか。私（じぶん）のことも分からないのに。私は、夜道に慣れてるの。その道をいきなり照らされても、めまいがして倒れるだけ。こわい」

「シンドウさーん。第二診察室へどうぞー」

診察室に呼ばれた彼女は立ち上がると、

「ごめんなさい。拒絶じゃないの。でも、――分からない」

俺の方を見ずにそう言って、診察室へと向かった。スクール鞄につけられている熊のマスコットが、彼女の歩調に合わせて跳ねる。その様子を見ながら、望もああいうマスコットが好きなんだろうかと考えた。

――近々、復職の挨拶に行こう。会社に行こう。きっと、望にも

会えるはずだ。

次に望(かのじょ)にあった時。
その時は、ちゃんと言おう。

あの夢のように、後悔しないためにも。

2週間前　（1）

病院に入ってすぐ、俺はシンドウさんを探した。
まだ来ていなければ、来るまで待とう。もしも今日会えなかったら、一週間後にまた来よう。俺の診察は二週に一度だけど、彼女の診察は週一だと言っていた。なら、来週でも会えるはずだ。
そんなことを考えながら、俺はさほど広くない待合室を覗いた。

彼女は、いた。

前にも見た、ダッフルコート。今日の彼女は私服姿だが、『いつもの鞄』を膝の上に置いている。熊のマスコットが二つ付いた、スクール鞄。手持ち無沙汰なのか、それとも癖なのか、いつものようにマスコットをいじっていた。
彼女の他に待合室にいるのは、中年の男性一人だけだ。彼女の向かいの席に腰掛けて、熱心に週刊誌を読んでいる。

俺は無言で近づくと、彼女の隣にそっと腰掛けた。『誰かが隣に座ったこと』に気付いた彼女が、ちらりとこちらに目を向ける。それから、

「山寺、さん」

何かに怯えるような顔をした。

……前に会った時は、嫌な別れ方をした。

けれど俺は、二週間前と同じセリフをわざと繰り返した。

「シンドウさん。――俺のこと、拒絶する？」

彼女は今にも泣き出しそうな顔で、けれど小さく首を振った。

「……会社に、挨拶に行ったんだ。復職のね」

俺が笑うと、彼女は「そう」とだけ返してきた。感情のこもっていない、――いや、わざと感情をこめていないような口調だった。

……彼女は一体どれくらいの年月を、そうやって過ごしてきたのだろう。

隠して、疑われて、――拒絶されて。

感情のない、そんなふりをして。

俺は頭を掻くと、彼女に頭を下げて言った。

「今日は、会えないかと思ってた。本当にごめん」

「……別に。謝らなくていい。謝るの、私だし。この前はごめん。拒絶じゃないとか言っておいて、逃げた。診察室に」

彼女まで頭を下げてきたので、俺は慌てて首を振った。彼女に謝らせるつもりなんてなかった。それに、

「そうじゃないんだ。それじゃなくて、俺が言いたいのは――」

「いいってば。『それが普通』なんだよ。普通はそうなの。あなたが謝る必要ない。あなたの考えは、反応は、普通だったよ」

かみ合っていないようで、かみ合っている言葉。二人にしか分からない、会話。

俺達の向かいに座っていた男性患者が、ちらりとこちらを見た。週刊誌を読んでいるふりをしながら、時折顔をあげて、こちらを観察しているのが分かる。

そのことに、シンドウさんも気づいていただろう。けれども彼女はそれを気にせず立ち上がると、テレビのチャンネルを変えた。『大型トラックとバス激突　死傷者八名』の事故現場を映し出していた画面が、陽気なＢＧＭとともに子供向け番組を流し始める。音楽に合わせて、パチパチと手を叩く子供たち。

ソファーに座りなおした彼女は、大きなため息をついた。

「酷い番組。楽しくない」

きゃっきゃと騒ぐ子供たちは無邪気で、けれどそれが悲しかった。

その日のシンドウさんの診察は、いつも以上に時間がかかった。——彼女はいま、精神的に不安定になっているのかもしれない。俺は体をゆすりながら、彼女が帰ってくるのを待った。彼女を待っている時間が、妙に長く感じられた。

三十分ほどで待合室に帰ってきたシンドウさんは、いつもの顔つきに戻っていた。無表情の仮面をつけた彼女はこちらを見て薄く笑い、それからいつもの、

「山寺さん。あと、二週間」

カウントダウン。

「――ああ、そうだね」

俺は苦笑する。彼女はきっと、最後までこのカウントダウンを辞めないだろう。――いや、彼女ではなくてこの世界が。この世界が、カウントダウンを辞めることはない。彼女はそれを、言葉にしているだけだ。

シンドウさんは薬局で、一週間分とは思えない量の薬を受け取ると、

「ここはいや。外がいい。テレビ、嫌いだから。外に出よう？」

そう言って、さっさと外に出た。俺は彼女の後に続く。病院帰りにいつも歩く歩道は、今日に限って人通りが多くて、彼女は顔をしかめた。大学生の男女混合組が大きな声で笑うのを聞いて、

「――うるさい。笑い声、嫌いなのに。あの公園も、今日は人がいるかもしれない。だとしたら面倒。……本当にうるさいね、今日」

周囲の人に気を遣う風でもなく、いつも通りの口調でさらりとそんなことを言った。数名が、彼女の方を振り返る。けれど、誰も何も言わない。

「山寺さん、時間は大丈夫？」

「え、ああ。俺は」

「だったら、うち。来て」

彼女の言葉を聞いて、俺はその場で凝り固まった。
『うち』って、シンドウさんの家のことか？

「え、いや、でも」

「大丈夫。両親、家にいるけど。どうせ私のこと、気にしてない。いや、気にしてるけど、腫れものの私に触れようとしない。だから平気。私が今更、ちょっと変なこと言ったりやったりしたところで、あの人たちは動じないよ。慣れてるから」

それに、と彼女。

「山寺さん、私のこと襲ったりしないでしょ？」

「そりゃ、そんなつもりないけど」

「ね。外うるさいし、うちに来て。お茶もお菓子も出せないけど。――いいよね？」

俺も俺で、分かってた。
シンドウさんが、俺を『誘っている』わけではないってこと。

彼女はまっすぐこちらを見据えたまま、続ける。

「……なにか話があるんでしょう。私に。……いや。私に、じゃないか。私じゃない、誰かに。まあ、どっちでもいいよ。こういうの、慣れてる。――私についてきてくれる？」

俺の返事は待たずに、彼女はさっさと歩き出す。
そんな彼女の後ろ姿を、俺は懸命に追いかけた。

2週間前　（2）

彼女の家は、お洒落な住宅街にある一軒家だった。『お洒落な』と表現したが、外壁の色がカラシ色だったり、屋根の色が目に悪そうな水色だったりと、とにかく派手な家が多かった。お洒落なというよりも、派手で落ち着かない住宅街と表現した方がいいかもしれない。

そんな住宅街にある彼女の家は、白い外壁に黒の屋根という落ち着いた造りだった。……普通の住宅街なら問題なかっただろうが、この派手な地域では、かえって浮いてしまっている。

彼女が門扉をあけている間、俺はこっそりと表札を確認した。そこでようやく、彼女の苗字は『進藤』と書くのだと知った。

「あがって。二階。私の部屋」

彼女に促され、俺は遠慮がちに「おじゃまします」と声を出す。玄関のすぐそばにあるリビングのドアは半開きになっていて、中の様子がよく見えた。中年の女性がこたつに入り、テレビを見ている。テレビに夢中になっているのか、こちらを振り返りもしない。

「あれ、私のお母さん」

俺がリビングを凝視しているのに気づいた彼女が、階段に足をかけながら言った。

「……あの人、見ないよ、こっちは。安心して」

一段ずつゆっくりと登っていた彼女が、俺の方を振り返る。俺はまだ、テレビ画面から目を放そうとしない彼女の母親の後ろ姿を見ていた。娘が帰宅したことには気付いているはずなのに、おかえりとすら言ってこない。

進藤さんのため息が、頭上からふってきた。

「――だから言ったの。両親は、私に触ろうとしないんだって」

彼女は諦めたように吐き捨てると、二階の突き当たりにある部屋に入った。

彼女の部屋を見た感想は、『思った以上にファンシー』だった。もっと、殺伐とした部屋を想像していたから。――彼女の部屋は、良い意味で散らかっていた。

水色を基調としたドット柄のベッドの上には、単行本が放置されていた。純文学ではなく、ライトノベル。いかにも中学生が好んで読みそうな、かわいらしいイラストがついていた。勉強机の上には、少し古い型のノートパソコン。その横には携帯型ゲームとそのソフトが、これまた無造作に置かれていた。

出窓には、ぬいぐるみが並べられている。それらは包帯を巻いているわけでも松葉づえをついているわけでもなく、ごくごく普通の犬や猫のぬいぐるみだった。

「……散らかってる、って思った？」

俺が部屋を見回していたからだろう。彼女は足元に転がっていたイルカのぬいぐるみをベッドの上に乗せながら、ぶっきらぼうに言

った。

「いや。思ってたよりも、かわいい部屋だと思った」

正直な感想を言うと、彼女は「なにそれ」と笑いながら、ベッドの上に腰掛けた。俺は壁に貼られている絵が気になり、近づいてみる。それは画用紙に描かれたもので、絵の下に『金賞』のシールが貼られていた。

「それ、私が描いたの。小学六年の時」

「へえ……」

俺は金賞のシールから、画用紙へと視線を戻す。学校のグラウンドを描いている絵、……らしかった。はっきりとそう断言できないのは、その絵の線があまりにもぼやけていたからだ。水彩画だからといえばそれまでかもしれないが、それにしても……。

「これ、もしかして抽象画？」

絵に詳しくない俺は、精一杯の知識を絞り出しながら彼女の方を振り返った。

彼女は小さく首を振る。

「水彩画。絵の具で描いた。学校のグラウンド」

「……全体的にすごく滲んでるけど、これが君の絵の特徴？」

「ううん」

彼女は目を細めて、首をかしげた。

「その絵のタイトルね。――なみだを通して見たセカイ、なの」

「……ああ、なるほど」

俺はもう一度、画用紙に目をやった。……涙を通してみた世界。そう言われると、しっくりくる。線はぼやけて、色は滲んで。――全体的にどこか寂しい色合いなのも、そのせいなのだろうか。

「今は描いてないの？」

振り返ると、彼女はこちらを向いたままベッドに横たわっていた。さきほどベッドに置いたばかりのイルカのぬいぐるみを、胸に抱えて。

……彼女がこれだけ無防備になっているのは、『相手が俺だから』だろう。

彼女はイルカのぬいぐるみを抱きしめたまま、笑った。

「たまに描いてるよ。描くのは好き。下手だけど」

「――そんなことない。俺はあんまり絵に詳しくないけど、この絵は好きだ。うまいよ」

俺が言うと、彼女はふっと息を吐いた。イルカを抱えたままごろりと寝返りを打って、俺に背中を向ける。その肩は、微かに震えていた。

「――山寺さん、私。褒められるのは、慣れてない」

「うん」

「慣れてないの。――……泣くこと、も」

「――うん」

声を押し殺して泣き始めた彼女の後ろ姿を、俺はただ眺める。彼女の小さな肩を支えてやることも、涙をぬぐってやることも、俺にはもう出来ない。

「……ね、山寺さん」

がたがたに震えた声で、彼女は俺に問いかける。
俺に問いかけたところで、どうにもならない。
それは、彼女自身が一番知っているはずだった。

「山寺、さん」

それでも彼女は、声を出す。言葉にする。その事実を。

「――……どうして、死んじゃったの？」

その言葉を聞いて、俺はゆっくりと目を伏せた。

2週間前　（3）

――今日は復職の挨拶に行って、望に会って話をして、それから病院へ行こう。

俺は一日のスケジュールを確認すると、布団から起き上った。

「あと二週間、か」

カーテンをあけて朝日を見ながら、進藤さんに言われるであろう言葉を一人で口にする。彼女と会えなくなるまで、あと二週間。

考え事をしながら作ったスクランブルエッグは見事に失敗し、そぼろ状になった。

会社に向かうため、二年前は毎日のように乗っていたバスに乗りこむ。通勤ラッシュを避けたおかげか、バスは空いていた。

適当な席に座り、窓の外に目をやる。――街の風景はすっかり変わってしまっていた、というわけではない。ただ、見たことのない建物や真新しい看板がちらほらと見えた。見覚えのない新地（さらち）を見ながら、二年前はここに何が建っていただろうかと考えたが、思い出せなかった。

口内炎って、治った途端にその存在を忘れちゃうでしょう。そんな言葉を、思い出した。

その時。

大型トラックが、こちらに向かって突っ込んでくるのが見えた。

「……え？」

我ながら間抜けだとは思うが、これが俺の最期のセリフとなった。正面衝突ではなく、バスの横腹にトラックが突っ込んできた形の事故。二つの物体は一瞬だけTの字になり、突っ込んできたトラックは電柱に激突、バスは横転した。――らしい。進藤さんが待合室で見ていた、ニュースによれば。

そのバスに乗っていた俺はといえば、トラックがこちらに突っ込んできた直後、大きな衝撃を感じたことしか覚えていない。体の内側を揺さぶられるような感覚に、意識を持っていかれた。

意識を取り戻した時、俺はやっぱり例の事故現場にいた。無傷で。だから、それを見た時は、

――自分の死体が横転したバスの中にあるのを見た時は、何かの冗談かと思った。

間抜けな電子音。やばいやばいと叫びながら、ぐしゃぐしゃになっているバスを携帯で撮影している学生。電子音は断続的に続く。やばいと叫ぶその声は、どこか楽しそうだった。

俺は唇を噛む。――あのバスの中で、人が死んでるのに。

「……何してんだよ！！」

叫んでみたが、誰もこちらを振り返ってくれなかった。

そこでようやく、俺は自分が本当に『そう』なったのだと思い知った。

「もしかしたらバスが爆発するかもしれない、下がった方がいい」と誰かが言いはじめ、蜘蛛の子を散らすように野次馬たちは逃げだした。間抜けな電子音も、ほとんど聞こえなくなった。

爆発しようがどうなろうが、俺にはもう関係なかった。

爆発しようが関係ないだろ、幽霊なら。

そこまで考えて、俺は進藤さんのことを思い出した。いや、むしろ、今まで忘れていたのが不思議だった。

『――私には幽霊が見える』

半信半疑で俺は彼女のもとへと向かった。今日は、彼女も診察日のはずだ。病院に行けば、きっと会える。――彼女に、俺の姿は見えるのだろうか。……見えないかもしれない。彼女の言っていたことは本当にただの妄想で、幻覚かもしれないじゃないか。そう思いながら。

病院の待合室にいたのは、彼女と中年の男性だけ。……その男性にも、俺の姿は見えていないようだった。

俺は無言で近づくと、彼女の隣にそっと腰掛けた。気づいてもらえないかもしれない。彼女にもやっぱり、俺の姿は見えないのかもしれない。そう思った。

けれど彼女は、ふっとこちらに目を向けた。そして、

「山寺、さん」

何かに怯えるような顔をした。

――生きている人間と死んでいる人間の区別も、できるらしい。驚愕している彼女の瞳を、俺は見つめる。

『――私には幽霊が見える』

彼女の話は、本当だった。それを自分自身で証明した俺は酷く間抜けだと、思った。

二週間前と同じセリフ。けれど、二週間前とは違う意味で、俺はその言葉を口にした。

「シンドウさん。――俺のこと、拒絶する？」

幽霊になってしまった、俺のことを。

彼女は今にも泣き出しそうな顔で、けれど小さく首を振った。

「……会社に、挨拶に行ったんだ。復職のね」

そしたら、死んでしまった。

俺が笑うと、彼女は「そう」とだけ返してきた。感情のこもっていない、――いや、わざと感情をこめていないような口調だった。彼女は一体どれくらいの年月を、そうやって過ごしてきたのだろう。

幽霊が見えるという事実を、隠して、疑われて、――拒絶されて。

俺は頭を掻くと、彼女に頭を下げた。

「今日は、会えないかと思ってた。本当にごめん」

彼女の話は作り話、――いや、彼女の妄想なんだろうと思っていた節があった。全ては幻覚で、幽霊なんかではないのだと。だから今日、病院(ここ)に来ても彼女には『見(あ)えない』かもしれないと、思っていた。

「……別に。謝らなくていい。謝るの、私だし。この前はごめん。拒絶じゃないとか言っておいて、逃げた。診察室に」

彼女まで頭を下げてきたので、俺は慌てて首を振った。彼女に謝らせるつもりなんてなかった。それに、俺がいま謝りたいのは二週間前のことじゃない。

「そうじゃないんだ。それじゃなくて、俺が言いたいのは――」

「いいってば。『それが普通』なんだよ」

『それが普通』。

――彼女の言い分を信じないのが、『普通』。

「普通はそうなの。あなたが謝る必要ない。あなたの考えは、反応は、普通だったよ」

かみ合っていないようで、かみ合っている言葉。二人にしか分からない、会話。

俺達の向かいに座っていた中年男性が、ちらりとこちらを見た。週刊誌を読んでいるふりをしながら、時折顔をあげて、こちらを観察しているのが分かる。

――ああ。あの男性から見れば、進藤さんが『一人で』話しているように見えるだろう。

彼女は中年男性の反応（それ）を気にせず立ち上がると、テレビのチャンネルを変えた。『大型トラックとバス激突　死傷者八名』の事故現場を映し出していた画面。トラックの運転手は重傷。死者は、バスの運転手と乗客三名。

その内の一人は、――俺だった。

見覚えのある事故現場から一変し、テレビは陽気な子供向け番組を流し始める。音楽に合わせて、パチパチと手を叩く子供たち。

ソファーに座りなおした彼女は、大きなため息をついた。

「酷い番組。楽しくない」

きゃっきゃと騒ぐ子供たちは無邪気で、けれどそれが悲しかった。

その日の進藤さんの診察は、いつも以上に時間がかかった。――彼女はいま、精神的に不安定になっているのかもしれない。もしもそうなら、その原因に俺のことも含まれているんじゃないかと考え、酷く不安になった。

三十分ほどで待合室に帰ってきた彼女は、薄く笑った。

「山寺さん。あと、二週間」

いつものカウントダウン。けれどそれは、俺が復職するまでの時間ではなくて。

俺がこの世界から、いなくなるまでの、時間。

『幽霊、二週間で消えちゃうから』

「――ああ、そうだね」

きっと、彼女の話は本当なんだろう。

俺がこの世界から消えてなくなるまで、あと、二週間なんだ。

2週間前　（4）

押し殺していたはずの声が漏れ始めて、本格的な嗚咽に変わる。
ベッドの上で身体を小さくして泣いている進藤さんの後ろ姿を、俺は見守ることしかできない。声をかけるのすら、躊躇われた。

人間にとって『言葉』はとても大切で、なのに酷く薄っぺらい。
その真偽を、疑ってしまうくらいに。

彼女がこうやって無防備な、――本当の姿をさらしているのは、相手が幽霊（おれ）だからだ。
あと、二週間で消えてしまう、俺の前だから。

彼女が自分の部屋に誘ったのも。
俺が「おじゃまします」と挨拶をしても、彼女の母親が振り向きもしなかったのも。
それは俺が『こうなった』からだ。

「――……言いたいこと、あるんでしょう。消えちゃう、前に」

彼女は鼻をグズグズいわせながら、必死に声を絞り出した。ように、見えた。こちらに顔は向けず、抱きかかえているぬいぐるみに向かって話しかけるような体勢で、彼女は言葉を紡ぐ。

「その言いたいことは、私に？　それとも、他の人に？」

「――君にも、他の人にも。どちらにも」

「そう。……他の人って、前に言ってた、大切な人？」

「――うん」

彼女は大きく息を吐き出すと、勢いよく目をこすり、ベッドから飛び起きた。『目をこすったら瞼（まぶた）が腫れるよ』と、忠告する間もなかった。

「ティッシュ」

彼女はぽそりと呟いてから、勉強机の上に置いていたティッシュを取り出す。それから、俺に構わず思いっきり鼻をかんだ。そんな彼女を見て思わず笑うと、彼女も笑った。真っ赤になった目と鼻が、酷く目立っていた。

「私、こういうの、慣れてないから。かっこ悪くてごめんね」

「――慣れてなくて、……慣れなくていいよ」

俺の言葉を聞いて、彼女の口元が歪む。それを隠すように、彼女は笑った。

「山寺さんの会いたい人、誰？　会いに行くよ、私。――ううん、伝えに行く。山寺さんの言葉。……死んだ人の言葉を伝えるの、たまにやるの。そういうのは慣れてるから、大丈夫」

死者の言葉を伝える、か。

「……変な目で、見られたりしない？」

「それも慣れてる」

彼女はティッシュを取り出すと、もう一度鼻をかんだ。俺は彼女から視線を逸らし、壁に貼り付けられている水彩画を見る。『なみだを通してみたセカイ』。

――いま、俺の顔も滲んでいるのだろうか。

「山寺さんの大切な人は、どこにいるの？　いつ会えそう？」

進藤さんに訊かれて、俺は考える。会える確率が高いのはきっと、

「俺の葬式、かな」

俺が勤めていた、そして望の勤めている会社に行くという手だてもある。けれど、進藤さんと望を『自然に』会わせることを考えるのなら、会社に押しかけるよりも葬儀に参列するふりをした方がいい気がした。

身寄りのない俺が死んだ場合、市役所か何かが簡単な葬儀をしてくれると言っていた。……いや、火葬だけだったかな。どちらにしろ望なら、それに来てくれるんじゃないか。

「――分かった。私、制服姿でいいのかな」

首をかしげる進藤さんに、

「黒い服なら何でもいい、……と、思う」

俺もまた、首をかしげて答えた。両親の葬儀を思い出そうとしたものの、遺影ばかりが目に焼き付いていて、段取りなんかはちっと

も思い出せなかった。

彼女はもう一度ベッドに座りなおすと、俺の方を見あげた。

「それで。なに？」

「え？」

「私に言いたいこと」

「――……ああ。えっと」

俺は頭を掻いた。いざとなると、何といえばいいのか分からない。それに俺は、もう。

「……またあとで話すよ。今じゃなくてもいいことだから」

「そう」

興味のなさそうな彼女の返事と同時に、扉をコツコツと叩く音が響いて、俺は内心でとび跳ねた。ノックしたのは進藤さんの母親だったらしい。明るいとは言い難い、低く聞き取りづらい声で向こう側から話しかけてきた。

「御飯できたけど。食べるでしょ？」

進藤さんは扉の方に顔を向け、俺と話していた時よりも大きな声で、

「すぐに行く。先に食べてて」

しどろもどろになるわけでもなく、さらりと自然な返事をした。ドアから離れていく足音を聞いて、俺は安堵する。その様子を見ていた進藤さんが、笑った。

「大丈夫。お母さん、霊感とかないから。もしも扉をあけられたとしても、ばれない」

「――そっか」

『ただの幻覚。両親の意見も、同じだった』

そういえばいつか、彼女がそんなことを言っていた。

進藤さんは立ち上がり、扉を開けようとしてから、こちらを振りかえった。

「山寺さん。私に話すこと、二週間以内に言ってね」

「――ああ。……えーっと、俺、今日は」

「どっちでもいいよ」

俺が言おうとしていたことを察した彼女が、ほほ笑む。

「山寺さんの好きなところに行ってくれていい。山寺さんの家でも、思い出の場所でも、……あるいは、この部屋にいてくれても構わない」

「いいのか？」

「うん。山寺さん、私のこと襲ったりしないでしょ？」

「……そりゃそうだけど。なんせ俺はもう、幽霊ですから」

俺が苦笑すると、彼女は笑いながら廊下に出た。
俺は一人、彼女の部屋に残る。

「――慣れてる、か」

彼女の口ぐせを、俺は声に出す。

疑われることに。
迫害されることに。
おかしな目で見られることに。
おかしな世界で生きることに。

傷つく、ことに。

「慣れてる、か」

なみだを通してみたセカイ。
彼女が慣れているのは、滲んでぼやけた視界なのかもしれない。

12日前

「来なかったね、火葬場にも」

責めるわけでも落ち込むわけでもなく、ありのままの事実をそのまま口にした進藤さん。そんな彼女とは対照的に、俺は焦っていた。

望とは簡単に会えるだろうと、高をくくっていたから。

「……仕事かな」

商店街の中を歩きながら、進藤さんが呟いた。

卒業式は既に終わり、在校生なら春休み中。そんな時期に中学校の制服を着ている彼女は、ただでさえ目立っていた。それに付け加え、『独り言』を言っている彼女は完璧に不審者だ。数人が、彼女の方を振り返る。けれど、そんなのはお構いなしで、彼女は俺に話しかけてきた。

「山寺さん。彼女の仕事先の電話番号、分かる？」

「……分かるけど」

「教えて」

彼女は人通りの少ない場所に移動すると、鞄から携帯電話を取り出した。携帯電話というか、スマートフォン。俺はそれを見て、目を丸くした。

「進藤さん、中学生だったよね？」

「――親に持たされてるの。危ないからって。本当は嫌いなんだけど。これ、リードみたい」

「リード？」

俺が小首をかしげると、彼女はタッチパネルを操作しながら言った。

「犬の散歩の時、首輪につけるヒモ。あれと同じでしょう、この機械」

「……首輪、じゃないんだね」

「違う。リード。首輪はね、所有者を表し個体を識別するためにつけるもの。リードは、遠くに行かないように縛りつけるもの。だから、この機械はリード」

彼女はそこで言葉を切ると、スマートフォンを耳に当て、咳払いをした。

……え？　嘘だろ？

眉をひそめる俺。彼女は澄ました顔で、今まで聞いたこともないような声を出した。それは、デパートのエレベーターガールを彷彿させる、『アナウンス声』だった。

「――あ、もしもし。私、『高田の家の者』ですけれども」

ぎょっとする俺。進藤さんは、今までにない最高の『作り笑顔と声』で、話を進める。

「……こちらこそ、いつも娘がお世話になっております」

「む、娘！？」

のけぞる俺を見て、彼女は声を出さずに笑った。彼女は今、「高田望の母」を完璧に演じきっている。愕然とする俺を置いてけぼりにして、彼女は愛想よく話を進め、「失礼いたします」とこれまた完璧な『アナウンス声』で挨拶してから、電話を切った。

スマートフォンを鞄に入れると、進藤さんはいつもの顔つきと、

「高田さん休んでるって、会社。山寺さんが死んだ、次の日から」

いつもの平坦な声に戻っていた。言葉が思い浮かばず、酸欠の金魚みたいに口をパクパクさせる俺に向かって、

「――顔の見えない会話なんて、こんなものでしょう？」

彼女はゆったりと、言葉を吐き出した。

これからどうする？　と訊かれて、俺は言葉に詰まった。

待つか、諦めるか、それとも。

「……『消えちゃう』までに、決めて」

彼女の言葉に、俺は無言でうなずく。――まったくもって情けない。慣れてるとか慣れてないとかの問題ではない。もう少ししっかりしろよ自分。

進藤さんは日の傾き始めた空を見てから、俺の方に視線をずらした。

「今日はもう、大切な人のところへは行かない？」

俺はファミレスで出会った時の望の姿を思い出し、逡巡してから頷いた。

「――ああ。今日はやめとく」

「そう。じゃ、付き合って。一緒に行きたいところ、あるんだ」

彼女はそれだけ言い残すと、一人で足早に進み始めた。俺は慌てて、彼女の後を追いかける。人とぶつからないよう必死に歩く俺を見て、彼女は笑った。

「山寺さん、ぶつかっても問題ないよ。すり抜けるだけ。それに、いちいち避けるの大変でしょ？　向こうは山寺さんの姿が見えてないから、避けようとしないし」

――確かに。目からうろこというか、なんというか。

開き直った俺は、人ごみの中を堂々と『すり抜けながら』歩いた。

彼女に連れてこられたのは、小学校だった。そこは俺の出身校ではなく、

「私、ここ、卒業したの」

彼女はそう言うと、敷地に足を踏み入れることなく迂回した。俺も後に続く。しばらく歩くと、ゴミ捨て場が見えてきた。緑色の大きなコンテナが二つ、置かれている。
進藤さんはゴミ捨て場までまっすぐ歩き、コンテナの前まで来るとこちらを振りかえった。それから、

「ここ、来て。見ればわかる」

彼女に促されて、俺は彼女の隣に並んだ。――ああ。

「あの水彩画……」

俺が言うと、彼女は無言で頷いた。
ゴミ捨て場から、学校のグラウンドが見えるのだ。のぼり棒、雲梯(うんてい)、砂場、ブランコ。その配置はすべて、あのぼやけた世界と一致していた。唯一違うのは、彼女の描いた世界は青空で、俺が見ているのは真っ赤な夕空だということだけだった。

「ここで描いたの？」

俺は真後ろにある緑色のコンテナを見ながら、尋ねた。

「そう。ここで。一人で描いた。……変な人間だと思った？」

彼女はこちらを見上げる。
俺は、コンテナからグラウンドに視線を戻した。
ここから一人で見る、グラウンドは。

「逆光が酷くて眩しいよ。よく描けたね、ここで。一人で……頑張

ったね」

「――だから、慣れてない。褒められるの」

彼女はふいっと横を向いて、寒いと言いながら鼻をすすった。

年齢差。それのせいにするのは、卑怯かもしれない。
けれどもしも、俺が彼女と同級生だったら。

俺はきっと、ここで一緒に絵を描いていただろうと思う。
酷く滲んだ、水彩画を。

1週間前　（1）

「あと一週間。……山寺さん」

精神科の待合室で熊のマスコットをいじっていた進藤さんが、ふいに口を開いた。スクール鞄につけられていた熊たちは、小さなショルダーバッグに付け替えられていた。

「――そうだね」

俺は自分の腕時計を確認した。デジタル時計は今でも正確に、時を刻み続けている。俺が死んでも、動き続けるそれ。――きっと、俺が『消えてしまう』まで、止まることはないのだろう。

そして、俺が消えても、この世界は動き続ける。この世界が『消えてしまう』まで、ずっと。

「……あのさ、進藤さん」

「高田さんに、会いに行く気になった？」

言い当てられて、俺は口をつぐんだ。

望は俺が事故に巻き込まれたあの日から、一度も会社に出勤していなかった。どうも、有休を取っているらしい。

――付き合っていた頃、彼女を家まで送ったことが何度かある。あの家までの道のりは、まだはっきりと覚えていた。

「高田さんの家、分かるの？」

熊のマスコットを握ったまま、進藤さんが顔をあげる。俺は頷き、

けれど弱々しく付け加えた。

「……あいつがまだ、実家暮らしなら」

もしも望が、一人暮らしをしていたら。そう考える俺に、進藤さんはさらりと言った。

「じゃ、高田さんの実家に行こう。難しいこと考えるのは、そのあとでいい」

商店街を抜けて、最初の信号を右。そのあと道なりにまっすぐ進んでから、赤い看板の目立つスーパーの前で、右折。さらに歩くと、大きな松の木が目印になっている平屋がある。そこを左に曲がれば見える、

「――あの家？」

進藤さんに訊かれて、俺は無言で頷いた。玄関先にいくつも置かれている植木鉢。そこに咲いている色とりどりのビオラ。「私は好きじゃないのに」と望が言い続けていた、薄茶色の扉が特徴的な物置きも、十年前と同じ場所にあった。その扉の色は、『メープルなんとか』って名前で、「名前だけなら美味しそうなのに」と望はいつもぼやいていた。

「……この家だ。間違いない」

白い壁は若干くすんでいるものの、彼女の家の外見はほとんど変

わっていなかった。

俺がこの家だと言った途端、進藤さんの細い指が、なんの躊躇いもなくインターホンを押した。「間違いない」という俺の声と、『ピンポーン』としか表現できない電子音が、綺麗に重なる。

「えっ！？　ちょっ……」

慌てふためく俺に、進藤さんはこれまたさらりと言う。

「さっさとしないと、山寺さん迷いそうだから。押してみた」

押してみたじゃない。俺は頭を抱えたいのを必死にこらえ、どうしたものかと考えた。

望に言いたいことはあるものの、それをどう伝えるか、まだはっきりとは決めていなかった。――卒業式で、祝辞の紙を忘れた校長のようなものだ。言いたいことは「卒業おめでとう」なのだが、それをどう伝えればいいのか分からない。いきなり壇上にあげられた校長（おれ）は、慌てふためくしかなかった。

『はい』

スピーカーから聞こえてきた声は、望のものではなかった。「彼女の母親だ」と俺が教えると、進藤さんは無言で頷いた。

「いきなりすみません。私、望さんの友達の、――……」

先ほどは躊躇わずにインターホンを押したはずの彼女が口ごもる。

しかしそれも一瞬で、

「山寺です」

進藤さんははっきりと、そう言いきった。

『……ヤマデラ？』

途端に、望の母親の声が強張った。明らかに警戒している。……俺と彼女が昔付き合っていたことも、俺が死んだことも知っている。そんな口調だった。

「望さん、いらっしゃいますか。出来ればいま、直接お会いしたいのですが」

警戒されているにもかかわらず、進藤さんはどんどん話を進めようとする。彼女は周りに流されない。そのせいか、逆に周りを流してしまうタイプでもあった。

『……ご用件は』

望の母親の警戒が、困惑へと変わった。ここまでくれば、完璧に進藤さんのペースに巻き込まれる。その事実を誰よりも知っているのは、そして身をもって経験しているのは、俺だと思う。ある意味残念な話だが。

「望さんが会社に忘れたものを届けに来ました。個人情報が含まれておりますので、望さんに直接お渡ししなければならない書類なんです。――今の望さんは、社に取りに来れる状態ではないだろうと思いまして、友人の私がこちらに伺わせていただきました。電話も

せず、いきなり押しかける形になってしまい申し訳ありません。書類の期限が迫っておりましたので……」

彼女はそこでわざと言葉を切り、こちらを見上げた。『書類の期限』とは恐らく、『俺が消えるまでの残り時間』のことだろう。

中途半端に会話が途切れれば、望の母親はきっと『向こうも困惑しているんだ』と思うだろう。いや、思ったらしい。

『少々お待ちください』

スピーカーから聞こえていたノイズが、ぶつりと途切れる。進藤さんは小さくため息をつくと、一歩後ろに下がった。

「……今の言葉、初めから考えてたの？」

俺が訊くと、彼女は首を振った。

「まさか。今ここで、作り上げたお話。――慣れてるから、嘘つくの。……でも、『友達』って言葉には慣れてない。おかげで、そこだけ話が途切れた」

彼女はもう一度ため息をつくと、

「高田さんのお母さんが、一緒に出てきたら厄介。私、明らかに会社の同僚に見えないし。そこ、釘さすの忘れた」

そう言って、板チョコのような茶色の玄関扉を眺めた。

数分後、望が出てきた。個人情報を取り扱っている書類だと言ったせいか、母親の姿は見えなかった。
俺は望の姿を見て、眉をひそめた。

ファミレスで会った時とは違う、やつれた顔。生気のない顔と言いかえてもいい。なのに、その瞳だけは、割れたガラスの破片のように光っていた。

十年前の俺と、同じ顔。
今の望は。

自分の大切な者を壊され、自分の精神を壊され、そのすべてを憎んでいた頃の俺と、まったく同じ顔をしていた。

1週間前　（2）

見覚えのない少女の顔を見て、望は怪訝な顔をした。進藤さんは澄ました顔で、「山寺です」と挨拶をする。それを聞いた望の顔が、さらに険しくなった。

「……あなた、誰？」

怒気を帯びる声。望の目の奥の鈍い光。

けれど進藤さんは、そんなことには動じない。

「うん。あなたが思ってる通り。山寺じゃない、私」

インターホンの時とは打って変わり、彼女はいつも通りの平坦な口調とため口で、望にそう告げた。

望の眉間に縦じわが寄る。こんなに険しい彼女の表情は、初めて見たかもしれない。

「――山寺って、高志のことを言ってるの？　高志には、親戚なんていないのに」

望の言葉を聞いて、進藤さんがこちらを振り返る。そういえば進藤さんは、俺の下の名前を知らないんだった。俺が頷くと、彼女は望の方に顔をむけ、「そうみたい。その山寺高志さん」と答えた。

「そうみたいって、……ふざけてるの？」

「ふざけてない。おかしいかもしれないけど」

進藤さんは真顔で答えると、あたりを見渡した。……ニュースで報道されるとしたら、閑静な住宅街とでも表現されそうな場所。何かを探していた進藤さんは諦めて、望の方に視線を戻した。

「できれば、場所を移動したい。ここで立ち話するの、しんどい。ファミレスとかない？」

「――何言って」

「三人で話したい。……あ。あなたから見たら、二人なんだけど」

「あなた、なんなの？　ふざけてるなら帰ってよ」

「――……山寺さんとあなたが最後に会ったファミレス、ここから近いのね。そこがいいかな。ドリンクバーふたつ。あなたはその時、ミルクティーを飲んだ？」

絶句する望。俺が必死になって伝えた言葉を、単語の羅列に変換したうえで口にした進藤さんは、ため息をついた。

「……山寺さん。こんなこと伝えても、あなたがここにいるっていう証拠にはならない。『あなたが生きてる時』に、聞いた話だって思われるのがオチ。当人しか知らないはずの思い出話を語ってもね、『自分たちの大切な思い出を、第三者に話してたのか』って勘違いして怒る人も多い。逆効果」

そう言われて、俺も絶句する。進藤さんの言うとおりだ。望の方に目をやると、彼女は肩を大きく上下させながら、こちらを見ていた。今にも襲いかかってきそうに見えるその様子に、俺は戦(おのの)く。

「高田さん」

進藤さんはそんな望をまっすぐに見据えながら、言い放った。

「私の話を信じるのも信じないのも、あなたの自由。私は、山寺さんがあなたに言おうとしていた言葉を伝えに来た。山寺さんが、ファミレスで、答えられなかったこと」

その言葉を聞いた望の肩が、一瞬だけ大きく震えた。

「……山寺さんの幽霊が今ここにいて、あなたにそれを伝えようとしているの。信じるのは難しいかもしれないけど。――生前、私が彼から聞かされた話だと思ってくれてもいい。どちらにせよ、彼の言葉だということは、本当。私はそれを伝えに来ただけ。……じゃなきゃ『他人の私』が、わざわざあなたの家に来てまで、あなたを怒らせるようなことを言う理由はない」

それはそうだ。俺は感心しながら、年下のはずの進藤さんの後ろ姿を見ていた。

「とりあえず、話、聞いてくれる？　聞くだけならタダだし。ドリンクバーの料金なら、自分で払う。……山寺さんは、あなたに奢ってもらったみたいだけど？」

首をかしげてうっすらとほほ笑んだ進藤さんに、

「……ちょっと待ってて」

望はそう言い残すと、扉を閉めた。

昼食を食べるには遅く、夕食を食べるには早い時間。そんな中途半端な時間のせいもあってか、ファミレスは異様に空いていた。愛想の悪い女性店員に「お好きなところへどうぞ」と言われたので、俺は前回来た時、望と座ったシートを指差した。

「あそこの席。いい？」

進藤さんが提案すると、少しだけ化粧を濃くして顔色をごまかしている望は、一瞬戸惑ってから頷いた。俺は進藤さんの隣に、望と進藤さんは向かい合うかたちで、それぞれ腰を下ろす。席に座ると、進藤さんはさっさとドリンクバーを二人前注文し、望の希望を訊くことなく立ち上がると、二人分のホットミルクティーを注ぎに行った。

「――……あなたは、高志の何なの？」

目の前ミルクティーを置かれた望は、気味の悪そうな顔をしながら進藤さんに問いかけた。

「山寺さんと、私？　病院でよく会う人」

相変わらず簡潔で、当人にしか分からないような進藤さんの答えに、俺は思わず苦笑した。進藤さんが、俺の方を睨む。睨むというより、目くばせ。俺は頷くと、進藤さんに向かって話し始めた。進藤さんは俺の言葉をしばらく黙って聞いた後、

「やりなおせないって」

俺が一番言いたくないと思っていた言葉を、真っ先に言い放った。望の顔が曇る。

『私たち、もう一度やり直せないかな』

あの日言えなかった、答え。

「高田さん以外に好きな人がいるから、やりなおせない。簡潔にいうと、そういうこと？」

言い繕うようにゴチャゴチャ言っていた俺の言葉を完全に無視して、進藤さんはさらりと言った。いや、俺に訊いてきた。……あれこれ考えていた言い分がすべて却下され、俺は萎れたヒマワリのように俯く。

進藤さんの言葉を聞いた望もまた、俯いている。そんな中、悠然と紅茶を飲んでいた進藤さんは、おもむろにカップをソーサーに置いた。それから大きく息を吸い込むと、呼気に声を乗せた。

「――望は高校生の時の俺も、今の俺も支えてくれてた。嘘じゃない。本当に、心からそう思ってるし感謝してる。だけど、俺には今、気になる人がいるんだ。だから君のことを『恋人』として見ることはできない。友達でいてほしい。……ただの同僚より格上げしてほしいって望は言ってたけれど、俺にとって君は初めから、ただの同僚じゃなかった。やり直すことはできないけれど、俺にとって君は、

大切な人なんだ。昔も、これからも、ずっと。――……こんな感じかな」

一字一句違えず、というわけではない。けれど、俺がゴチャゴチャ言っていたことの八割方を、そのまま言葉にしてくれた。それから、

「このあとに続いてる言葉、私は言いたくない」

俺の方を見て、進藤さんははっきりとそう言った。

――この後に続いていた、言葉。

進藤さんはため息をつき、再びカップに手を伸ばす。

望は、声をあげて泣き始めた。

1週間前　（3）

悲鳴に近い望の声に、先ほどの無愛想な女性店員が反応した。こちらに声をかけるべきかどうかで悩んでいるらしく、近くの通路をうろうろしている。それを見た進藤さんは

「面倒」

一言そう呟いてから、右往左往している女性店員に「大丈夫ですので。すみません、お騒がせして」と声をかけた。店員はひきつった笑みを浮かべつつ、そして好奇の目を向けつつ、俺達の席から離れていった。

進藤さんは店員から望へと視線を戻すと、テーブルの端に置かれていた紙ナプキンを数枚手に取り、望に渡した。

「ポケットティッシュ持ってない。ごめん」

そう言ったあとで、

「あと、敬語じゃなくてごめん」

今更、としか言いようのない謝罪をした。

望が落ち着くまでの間、進藤さんはほとんど声を出さなかった。首を振る扇風機の如(ごと)く、おろおろと二人の顔を見比べている俺をよそに、進藤さんはミルクティーを飲み干すと、今度はキャラメルマキアートを取りに行った。更には（先ほどの無愛想な女性）店員を

呼び出し、バニラアイスが上に乗っているアップルパイを注文した。この際、望に「あなたも食べる？」と声をかけたが、望は首を振った。

アップルパイを持ってきた女性店員は、ぐずぐずと泣き続けている望にちらちらと目をやりながら、アップルパイをテーブルの真ん中に置いていった。

若干溶けたバニラアイスの乗った、アップルパイ。

進藤さんはその皿を自分の方に引き寄せると、ぐずぐずと泣き続けている望のことなど気にもせず、一人でアップルパイを食べ始めた。

……俺だけでなく望も幽霊で、『この席に座っているのは自分一人だけです』とでも言いだしそうな態度だった。

「――言いたくないとは言ったけれど」

進藤さんはナイフでアップルパイを切りながら、声を出した。それは望にではなく、俺に宛てた言葉だった。

「あなたの言いたいことは分かるし、私も気持ちは同じ。ただ、言い方の違いというか」

彼女はそこまで言うと、皿の上でボロボロになっているアップルパイを見てため息をついた。そして、「パイ生地は食べにくいのが弱点」と、これまた小さく呟いた。

バラバラになったアップルパイをなんとか食べ終えた進藤さんは、

「高田さん」

やっと泣きやみ始めていた望に、声をかけた。名前を呼ばれた望は大きく反応し、少しだけ顔をあげた。

「山寺さんは、あなたに幸せになってほしいと思ってる。あなたにとっての幸せの定義が、なんなのかは知らない。結婚か、仕事か、それとも他の何かなのか。それはどうでもいい。あなたが決めてくれれば。どんな形であれ、あなたが幸せだと思えるような。そんな未来になってほしいと、山寺さんは思ってる。……だから」

皿の上に置かれていたナイフが少しだけバランスを崩し、カチャンと音を立てた。

「だから、復讐はやめて」

俺と望はほぼ同時に、進藤さんの方を見た。俺は、『復讐するなと言ってほしい』なんて、進藤さんに伝えた覚えはない。

両者の反応を見た進藤さんは、

「……見れば分かる。それくらい。そういうこと考えてるなって」

俺と望、二人に向かって言い放った。

「中身がスカスカのアップルパイと一緒。食べても幸せにはなれない。……スカスカのほうが好きな人もいるだろうけど、高田さんはそういうタイプじゃない。違う？」

合ってるようなズレてるような比喩表現で、進藤さんは話を進め

る。

「トラックの運転手だっけ？　その人を殺しても、アップルパイの中身が増えるわけじゃない。スカスカの空洞部分を埋められるわけでもない。あなたの空洞を埋める方法は、もっと別のところにある。結婚かもしれないし、仕事かもしれないし、趣味かもしれない。……ただ、人を殺すことで埋められる空洞（もの）は、ないの」

再び泣き始めた望を見て、進藤さんは「説得、得意じゃないんだよね」と呟いた。ちらりと俺の方に目をやる。それからわざと、ほほ笑んだ。

「高田さん。山寺さんのこと、忘れないでね」

進藤さんの言葉に、俺は目を丸くした。

「ちょ、どうしてそんなこと……」

思わず呟いた俺に、彼女はもう一度目をやる。今度は、笑っていなかった。

「同じだから。生きてても、死んでても」

彼女の言葉には、迷いがない。アップルパイを注文した時と同じ口調で、彼女は話を続ける。

「囚（とら）われるのは、同じだから。……生きてる人間にも死んでる人間にも、囚われる。それが人間だから。だったら、覚えておいた方が

いい。楽しかったことも苦しかったことも。――山寺さんと高田さんの思い出って、嫌なことばっかりじゃないでしょ？」

自分に言われたのだと思ったらしい望が、小さく頷いた。

俺が俯きながら呟いた記憶（ことば）を、進藤さんは聞き逃さなかった。

「コンビニでコロッケを買って、二人で公園で食べたの、とか？そういうことも、覚えていて。――絶対に忘れるな、とは言わない。生きてる人間のことでも、忘れちゃうことはあるから。……一緒なの。生きてる人間も、死んでる人間も、ある意味では」

そこまで言うと、進藤さんは伝票を手元に引き寄せた。

「山寺さんからの伝言は、これで終わり。いきなり呼びだしたりして、ごめんなさい」

伝票に目を通した進藤さんは、「ドリンクバーの料金、私がもつ。思ったより安いから」と言って立ちあがった。かと思うと、もう一度望の方に目を向けて、

「――あなたが復讐しても、山寺さんは喜ばない。いや、悲しむよ。……それがあなたにとって幸せなのかどうか。後は自分で考えて」

突き放すように、言い放った。

「――……待って」

歩き始めた進藤さんに、望が声をかける。その声は、酷く掠（かす）れていた。望は口元に両手をあてたまま、問いかける。

「高志は、……本当にそう言ってた？　思ってた？　私のこと、大切な人だって。幸せになってくれって。私、なんの役にも立てなかったのに」

「思ってたよ。間違いない」

進藤さんは、きっぱりと言い切った。

「じゃなきゃ、わざわざ私のところに来ない。高田さんに伝えたいことがあるんだなんて、言わないから」

手の代わりに伝票を左右に振って、レジへと向かった進藤さんに、

「……ありがとう」

俺と望は、聞こえないくらい小さな声で言った。

1週間前　（4）

「俺のことは忘れてくれ。――望にそう伝えてくれって、言ったはずなんだけど」

ファミレスからの帰り道、俺はぶつぶつと文句を言っていた。前を歩く進藤さんは悪びれた様子もなく、

「だから言った。『言いたくない』って。聞いてなかった？」

しれっとそんなことを言った。彼女に文句を言える立場でないことは、重々承知している。しかし、

「だからって、『山寺さんのこと忘れないでね』って……。俺が言った言葉と正反対じゃないか」

「そんなことない」

彼女は歩きながら、鞄につけている『包帯熊』をいじる。小さなショルダーバッグには、彼女の嫌うスマートフォンと財布、あとは精神科で処方された薬くらいしか入っていない。鞄につけられている熊のマスコットだけが、唯一の『私物』のように見えた。

「山寺さんが言いたかったのは、『俺のことを忘れて幸せになってくれ』ってことでしょ？　幸せになってほしいとは私も思ったし、だから伝えた。山寺さんのとは、言い方が違ったけれど。……これもその場で言ったよね。聞いてなかったの？」

「――忘れてくれ、っていうのが重要ポイントだったんだよ」

「それは言いたくないって言ったじゃない」

一歩も引かない彼女に、食い下がる俺。

彼女は、いじっていた熊のマスコットを手放した。包帯熊は、骨折熊の隣に並ぶ。まるで、寄り添うように。それから急に足を止めると、こちらを振りかえった。

「忘れてどうなるの？　それであの人は幸せになるの？　あなたは？　……これも言ったけれど、人間は、『生きてる人間』にも縛られる。死んだ人間のことだけを引きずるわけじゃない。そして、悲しい記憶だけを引きずるわけでも、ない。それにね」

彼女は少しだけ意地の悪い顔でほほ笑んだ。小悪魔的ともいえる、その笑顔。

「忘れてくれって言われた方が、かえって忘れにくいよ？　それこそ、逆に縛っているようなもの。違う？」

「うっ……」

返答に窮した俺に、彼女はため息をつく。少しだけ俯き、息を吸う。

「存在は、消せるものじゃないの。だから、忘れない」

進藤さんは空を見上げる。赤、青、白、灰色。いろんな色を混ぜた、夕暮れの色。

彼女の横顔を見て、俺は覚悟を決める。

「……進藤さん」

「なに？」

空を見上げたまま、彼女が視線をこちらに向ける。俺はポケットに手を突っ込んで、拳を握りしめた。

「俺、自分の家に行ってみる。遺品とか、どうなってるのか見ておきたい」

「――そう。……あなたの両親の幽霊は」

「分かってる。いないんだろ？　それでも、見に行ってみるよ」

「そう。……ついていこうか？」

何かを察したような、彼女の声。俺は首を振る。

「いや、いいよ。一人で行けるし」

「――山寺さん。あと一週間……いや、今日はもうすぐ終わるから。残り六日ね。消えちゃうまで」

「……うん」

彼女の顔を直視できず、熊のマスコットを見つめる。初めは理解できなかったそのマスコットに、何故か愛着がわいていた。

彼女はいつも通りの平坦な声で、けれども、

「山寺さん。私の家、また来て。消えちゃう前に。お邪魔しますと

か言わなくていいから。あと、土足でいい。幽霊がいきなり部屋に入ってくるの、私は慣れてるから大丈夫」

釘をさすように、言う。

「うん」

俺が笑うと、彼女は顔を曇らせたまま、俺に向かって手を振った。俺も手を振り返す。もちろん周りの人間から見れば、彼女が一人で手を振っているようにしか見えないだろう。

それは彼女も知っているはずで、なのに彼女は手を振ってくれる。

彼女は、生者と死者の見分けがつく。

けれど、生者と死者を分けない。

だから。

彼女の小さな後ろ姿を見送ってから、俺は自分の家へと歩き出した。既に遺品は運び出されているかもしれないと思ったが、役所の手配が遅れているのか、それともそれが普通なのか、その家は俺が住んでいた頃と同じ風景を保っていた。

台所を覗いてみるが、もちろん母親の姿はない。縁側を覗いたって、父親がいるわけでもない。そしてもうすぐ。俺も、『この家の風景』から、消えてなくなる。

いや、傍(はた)から見たら、俺はもう『消えて』いる。

「口内炎、か」

彼女の言っていた言葉を思い出し、一人で笑った。

『幽霊が消えちゃうのも、口内炎と一緒なの。見える間はすごく気になるのに、見えなくなったら、しばらくその存在すら忘れちゃうような。そんなもの。案外』

あと六日。俺が姿を現さなければ、彼女は俺のことを自然と忘れてしまうのだろうか。

ある時ふと思い出して、『ああ、そんな人もいたな』と思ってもらえる程度の、そんな人間になれるだろうか。

縛り付けるつもりはない。いや、縛り付けたくない。俺のように毎日毎日、朝起きるたびに期待して台所を覗くような、そんな関係にはなりたくなかった。

たまに思い出す、その程度でいい。忘れないのなら、せめて。

伝言役として彼女を利用したくせに、あれだけ会話した癖に、そんなこと考えるなんて虫のいい話かもしれない。

それでも、俺は。——俺にとって。

「幸せになってほしいのは望だけじゃ、ないんだよ」

俺は『誰もいない家』で独りごち、滑稽な自分を嗤った。

零（ゼロ）

デジタル時計が示す日付と時刻を、俺はしばらく眺めていた。
今日。

今日、俺は消える。

自分が死んだ明確な時刻は分からない。即死だったのかどうかも分からない。分かっているのはバスに乗った時刻だけ。トラックに衝突された時刻ですら、はっきりとしていなかった。
俺はもう一度、腕時計を見る。現在、朝の八時半過ぎ。

「――あと二時間だな」

バスに乗ったのは、十時半過ぎ。バスに揺られた時間は、さほど長くなかった。となると、俺が消えるのは……。
俺は自分のベッドから起き上がると、台所は覗かず外に出た。成仏する前って、幽霊はどこにいればいいんだろう。――などと、間抜けなことを考える。
行きたいところに行けばいいよ。……多分、彼女ならそう言うだろう。
俺は笑うと、上着のポケットに手を突っ込んで歩き始めた。

この六日間、俺は外に出ず、ずっと自宅で過ごしていた。別に、最期の時を自宅で過ごしたいと思ったわけではない。街を徘徊しようかとも思ったが、もしかしたら進藤さんに出くわすかもしれないと考え、あえて自宅から出なかったのだ。

『私の家、また来て』

彼女の言葉が、頭の中から離れなかった。けれど俺が今から向かう先は、彼女の家ではない。精神科の待合室でも、ない。彼女と何度か話しに行った公園でもなかった。

俺が最期に、見ておきたい景色。

うろ覚えだったが、なんとか辿り着くことができた。あの時とは違い、青い空。それは、あの絵の景色と同じだった。

「――……なみだを通して見たセカイ」

俺はその風景の名前を口にする。何時だろうと関係なく、逆光の眩しいグラウンド。背後にある緑のコンテナ。――彼女が、一人で過ごしたその時間。

「こんな気分だったのかな、あの絵を描いた時」

俺は首をかしげながら、一人で呟く。

彼女があの絵を描いた時の。……あの絵から滲みだす、感情。

「自分が壊れて消える、そんな感じ」

俺の思考を、俺よりも高いソプラノが紡ぐ。俺はギョッとし、声の方向に顔を向けた。

「……そんな気分で描いた。あれ」

そこにいたのはやはり、――進藤さんだった。

小さなショルダーバッグの上で、熊のマスコットがふたつ揺れている。

彼女は俺の方に近寄りながら、グラウンドの方に目を向けた。俺の方は見ずに、言葉を紡ぐ。

「――探した。待合室にも公園にもいないし。ファミレスも覗いた。ゴミ捨て場にいなかったら、高田さんの家に行ってみようと思ってた。――私の家に来てって、言ったのに」

「……ごめん。忘れてた」

「山寺さん。今日。消えちゃうの」

俺の空々しい嘘を華麗にスルーし、彼女はいつものカウントダウンをする。声が若干震えているのは、探しまわっていたから、だろうか。

「まだ聞いてない。山寺さんが、私に言いたいこと」

「――ああ、うん」

もう、それを言うつもりはなかった。ありがとうと伝えられたら、それで。

彼女は俺のそばにやってくると、頭を抱えるような格好でその場

にうずくまった。俺は驚いて、彼女の隣に寄り添った。

「進藤さん？　だいじょう……」

「慣れてないの、私。人が死ぬのは、当たり前。だから悲しいことじゃないと思ってた」

胸に手を当てて苦しそうに呼吸（いき）をしながら、彼女は必死に声を出す。

「――違うの。人が死ぬのは当たり前だけど、『勝手に悲しくなる』。そういうものなんだ。……好きな人が死んだら、勝手に悲しくなって、泣くの」

……彼女は今、なんて言った？

ぼやけた俺の視界と、滲んだ彼女の目。

「……俺、は」

言わずに消えようと思っていた。その方がいいって、思ってたのに。

「俺は、――君のことが好きだった。……いや。今も、ずっと」

伝えたかったのは、その一言だけ。二週間も待たせて、言いたか

ったのはその一言だけ。
言ったから何かが変わるわけではない。
俺が生き返るわけでも、彼女が幸せになるわけでもない。
むしろ、この言葉は彼女にとって『リード』になる可能性があるんじゃないか。
そう思って、言えなかった、言葉。

「……六日前に聞いておけばよかった。それ」

彼女は苦笑しながらそう言うと、右腕で涙を乱暴にぬぐった。俺の視界が、更にぼやける。

「六日前に聞いておけば、簡単なデートくらい出来たのに。勿体なかった」

「……でも、そんなことしたら、余計に別れるのが辛くなるから」

「そうだね。でも」

彼女は思いっきり鼻をすすってから、ため息をついた。

「でも、いい思い出がいっぱい出来る。それこそ、忘れるのが勿体ないくらいの」

彼女の笑顔が、世界が、更にぼやける。それは自分の涙のせいではないのだと、ようやく気付いた。
腕時計で時刻を確認する。――……十時、三十六分。

「――幽霊は口内炎じゃなかったのか？」

俺が苦笑すると、

「違うみたい。山寺さんの姿、さっきから滲んできてるの。……このまま、景色の中に溶けちゃうんじゃないかって思えるくらい。いつの間にか消える、ってわけじゃないんだね。幽霊は。……ううん、山寺さんは」

彼女はそう言って笑うと、口元を両手で覆った。彼女の両目から零れる涙を、俺は視認することすら難しくなっていた。

「……君のリードとか、首輪にはなりたくないんだ」

俺が言うと、彼女はうなずいた。いや、俯いた。

「俺のことを、君は忘れないかもしれない。けれど、君には『これから』がある。そこにはもう、俺はいないから。――たまに思い出す程度でいいんだ。あんな人もいたなって、思い出すくらいで」

「……うん」

ぼやけた視界は、徐々に白くなりはじめていた。

彼女の顔も、表情も、もう分からない。けれど声だけははっきりと聞こえる。

声を出すことも、まだできる。

「進藤さん。……下の名前」

俺が言うと、彼女は思い出したように笑った。

「みき。未来(みらい)って書いて、みきって読むの。そういえば、教えてな

かった」

「未来（みき）」

彼女に俺の顔が見えているかは分からない。けれど、出来る限りの笑顔で伝える。

「君は生きて。未来（みらい）を」

――ありがとう。

真っ白になった世界で、もう一度。

俺は彼女の名前を、呼んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4161z/

滲んだ世界で、見えない言葉を。

2012年1月2日11時52分発行